

全国学力・学習状況調査における中学校の英語の 実施に関する中間まとめ 基礎資料

目次

1. 学習指導要領と学力・学習状況調査

- ・学習指導要領の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- ・「学力の三要素」と「生きる力」について・・・・・・・・ 4
- ・言語活動の充実について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- ・全国学力・学習状況調査関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- ・生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識・・・・・・・・ 7
- ・H15年度教育課程実施状況調査（中学校・英語）抜粋・・・・ 15
- ・H17年度特定の課題に関する調査（英語「話すこと」）ポイント抜粋 16
- ・H22年度特定の改題に関する調査（英語「書くこと」）抜粋・・・・ 17

2. 学習評価の在り方について

- ・観点別学習状況の評価について・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
- ・多様な評価方法の例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
- ・英語 中学校におけるパフォーマンス等の評価の現状・・・・ 28

3. 新しい学習指導要領等が目指す姿

- ・学習指導要領改訂の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
- ・これからの教育課程の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
- ・学習指導要領改訂に係る議論に関するこれまでの経過と今後のスケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

4. 学習指導要領の理念を実現するために必要な方策(外国語教育関係)

- ・外国語教育に関する現状について・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
- ・最近の英語教育に関する経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
- ・グローバル化に対応した英語教育改革実施計画スケジュール・・・・ 40
- ・今後の英語教育の改善・充実方策について 報告（概要）・・・・ 41
- ・英語教育の抜本的強化のイメージ・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

- ・小・中・高等学校を通じた目標等の主なイメージ・・・・・・・・ 44
- ・高等学校 英語科目の今後の在り方について・・・・・・・・・・ 46

5. 英語教育の改善・充実について

- ・現行学習指導要領の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
- ・中学校学習指導要領の取組について・・・・・・・・・・・・ 50
- ・各学校における学習到達目標の設定・・・・・・・・・・・・ 52
- ・生徒・教員の英語力及び指導状況について・・・・・・・・ 53
- ・生徒の英語力の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
- ・児童生徒の英語に対する意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
- ・小学校外国語活動調査関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
- ・中学校外国語科調査関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
- ・外部試験団体と連携した英語力調査事業・・・・・・・・・・・・ 76
- ・英語教育改善のための英語力調査（高3対象）結果概要・・・・ 77
- ・秋の事業レビュー関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
- ・各試験団体のデータによるCEFRとの対照表・・・・・・・・・・・・ 84
- ・主な英語の資格・検定試験の概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

6. 高大接続

- ・大学入試者選抜試験の一体的改革・・・・・・・・・・・・・・ 89
- ・高等学校基礎学力テスト（仮称）・・・・・・・・・・・・・・ 97
- ・大学入学者希望者学力評価テスト（仮称）・・・・・・・・・・・・ 99

7. 英語教育における今後の養成・研修について

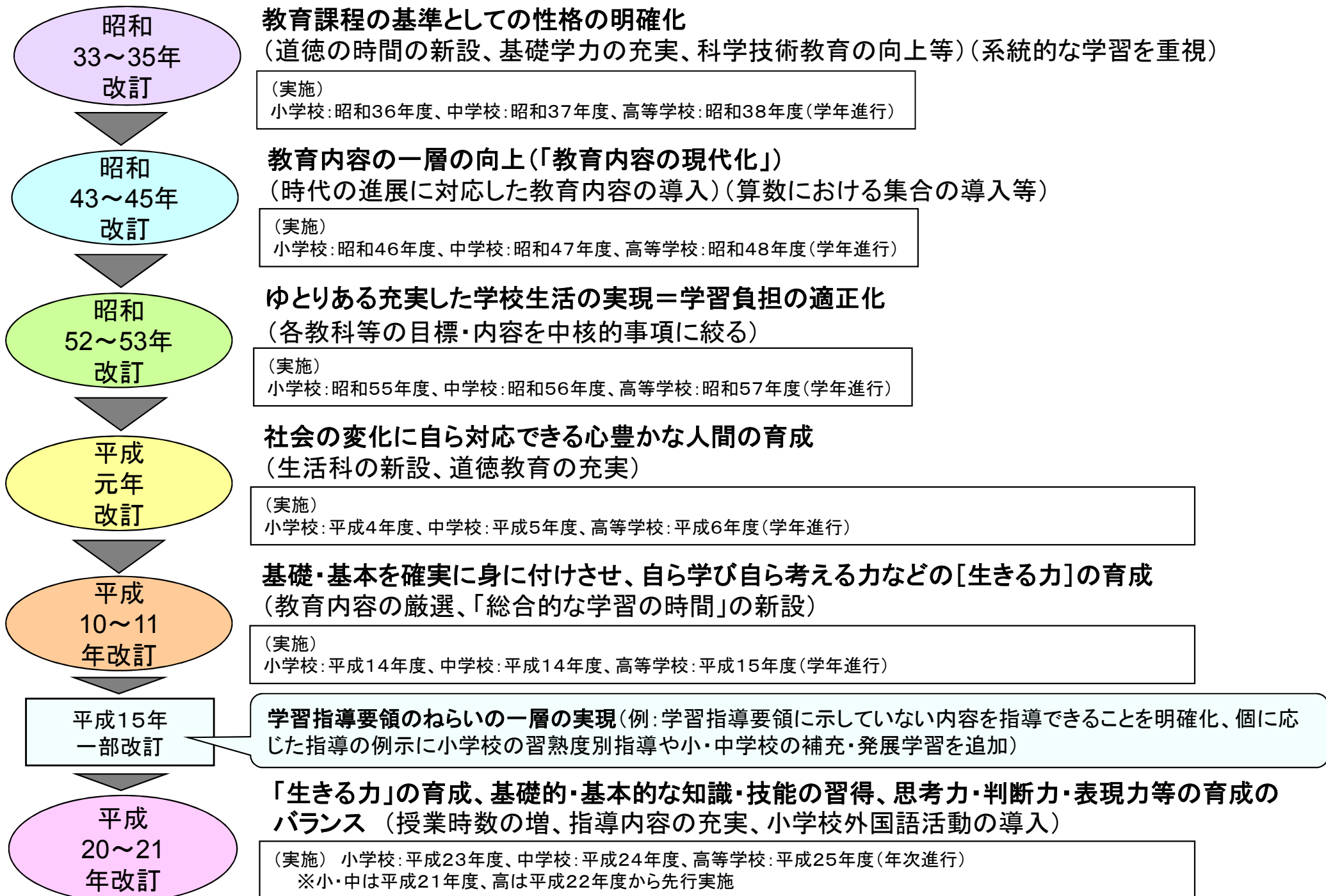
- ・教員の資質能力の向上について・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
- ・新たな英語教育の実現のための研修体制（イメージ）・・・・ 111

8. 外部試験団体と連携した英語力調査事業について

- ・平成27年度英語力調査結果（中学校3年生）の速報・・・・ 115

1. 学習指導要領と学力・学習 状況調査

学習指導要領の変遷



「学力の三要素」と「生きる力」について

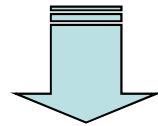
〈現行学習指導要領の理念〉

- 平成10～11年改訂の学習指導要領の理念は「生きる力」を育むこと
- 「知識基盤社会」の時代において「生きる力」を育むという理念はますます重要
- 教育基本法改正等により教育の理念が明確になるとともに、学校教育法改正により学力の重要な要素が規定

○ 学校教育法（昭和22年法律第26号）

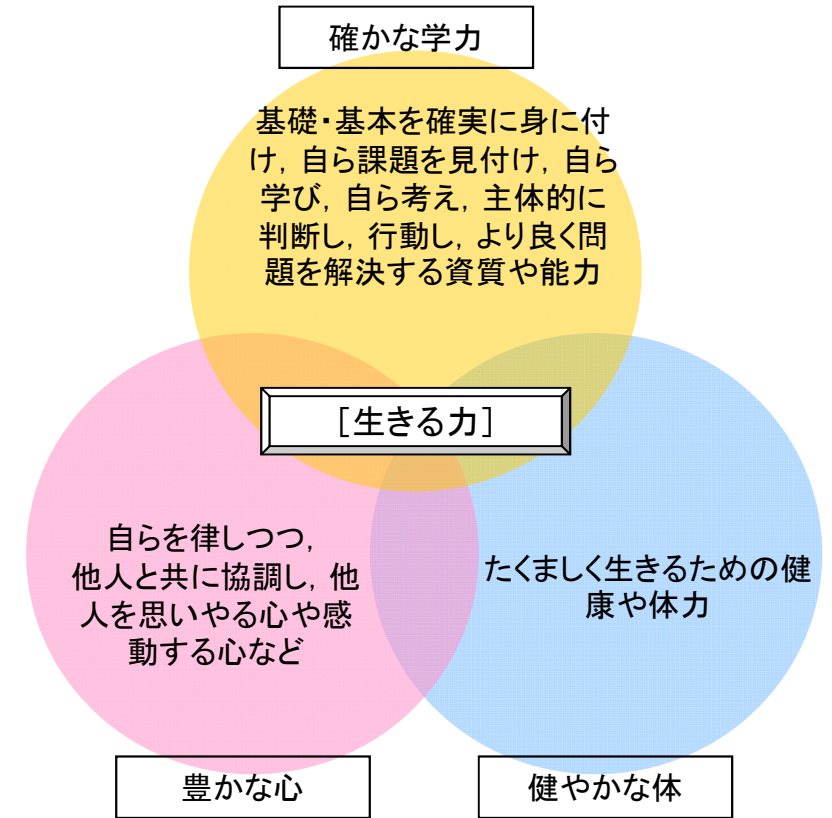
第30条（略）

- ② 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。



現行学習指導要領においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成

「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、これからの社会において必要となる知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をより効果的に育成



言語活動の充実について①

現行学習指導要領では、「確かな学力」、特に「思考力・判断力・表現力等」を育み、各教科等の目標を実現するための手立てとして、言語活動の充実について規定

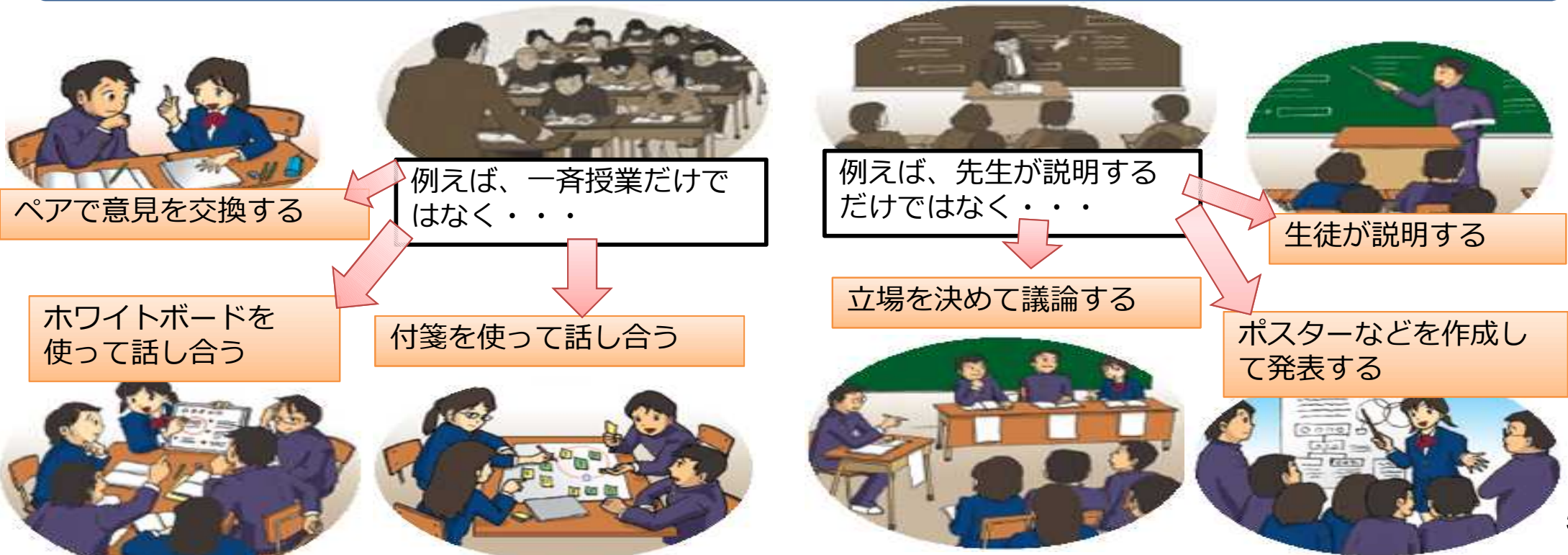
小学校学習指導要領 総則（中学校・高等学校においても同様）

第1 教育課程編成の一般方針

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2(1) 各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。



言語活動の充実について②

～言語活動の検証・改善のための有識者との意見交換（平成26年10月10日,31日）より～

1. 言語活動の位置付け

- 習得、活用、探究のいずれの場面においても、**各教科における学習活動の基盤**となるのは言語の能力。**豊かな心を育むことや人間関係を形成**する上でも重要。
- 平成20年中央教育審議会答申では、思考力・判断力・表現力を育むために各教科に必要な学習活動の例として右の6点を示し、**これらの学習活動の基盤となるものは、広い意味での言語**であるとした。
- こうした力の育成は、**国語科だけでなく、すべての教科で取り組まれるべきもの**。現行学習指導要領において初めて求められたものではなく、従前から、国語科をはじめ各教科等において学習活動の重要な要素として取り組まれてきた。

思考力・判断力・表現力を育むために
各教科に必要な学習活動の例

- ①体験から感じ取ったことを表現する
- ②事実を正確に理解し伝達する
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④情報を分析・評価し、論述する
- ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

2. 成果と課題

<成果>

- 多くの小・中学校で言語活動を意識した活動に取り組んでいる
- 言語活動の充実が**児童生徒の学力の定着に寄与**している
(全国学力・学習状況調査の結果)

<課題>

- 言語活動についての**目的意識**や、教科等の**学習過程における位置づけが不明確**であったり、指導計画等に効果的に位置付けられていないことがある
 - ・単なる話合いにとどまり形骸化している例
 - ・言語活動を行うことが目的化している例 など
- 言語活動を行うことに負担を感じている教師や、**時間を確保することが困難と考**えている教師が少なくない

3. 言語活動の今後の方向性

- 各教科等の教育目標を実現するため、**見通しを立て、主体的に課題の発見・解決に取り組み、振り返るといった学習の過程において、言語活動を効果的に位置づけ、そのねらいを明確に示すことが必要**。アクティブ・ラーニングを構成する学習活動の要素を検討する際も、**言語が学習活動の基盤となるものであることを踏まえた検討が必要**。
 - ・「その活動で何を実現しようとするのか」という観点から、授業の中での言語活動の位置付けを一層明確にすること
 - ・数学的活動や、理科や社会などの問題解決的・探究的な活動など、各教科の学習の過程において、言語活動を効果的に位置付けること
 - ・言語活動が学びを深めるものとするためには、授業の冒頭に見通しを持たせ、最後に振り返りをするこの重要性について理解を徹底することが必要
- 言語活動により時数の確保が難しくなるという見方もあるが、**学年等を超えて長期的に言語活動を行う能力の育成を積み重ねていくことにより、一層効果的で効率的な学習が可能となるという視点も重要**。
継続して言語活動に取り組めることで、児童生徒の言語活動を行う能力が高くなるとともに、言語活動を意識することにより目標・内容と学習活動の関係が明確となり、言語活動を取り入れた方が従来よりも学習が早く進み、学習に要する時間が短縮できるという考え方を重視することが必要。
- 教員の資質向上も含め、**学校が全体として取組を進められるよう、教育委員会や大学等による支援や環境整備等**を行いながら、今後さらなる充実が図られるようにしていくべきである。

1. 全国学力・学習状況調査の概要

1 調査の目的

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ・以上の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査対象

小学校第6学年、中学校第3学年

3 調査内容

- ①教科に関する調査(国語A・B、算数・数学A・B) ※24年度・27年度は「理科」を追加。理科は3年に一度の実施
- ②生活習慣や学習習慣等に関する質問紙調査(児童生徒に対する調査／学校に対する調査)

2. 平成28年度調査【悉皆調査】

- 調査日: 本体調査 平成28年4月19日(火)
経年変化分析調査 平成28年5月16日から6月30日の期間中、調査の対象となった学校が実施可能な日時
- 国語、算数・数学の2教科での悉皆調査と抽出による経年変化分析調査を実施

3. 平成29年度調査【悉皆調査】

- 調査日: 平成29年4月18日(火)
- 国語、算数・数学を実施。

(参考) 全国学力・学習状況調査に関する決定等

- 教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育の在り方について」(平成25年6月28日)
『国は、全国学力・学習状況調査において理科の調査を定期的実施する』
- 第2期教育振興基本計画(平成25年6月14日閣議決定)
『全国学力・学習状況調査について、国として市町村や学校等の状況を把握するとともに、全ての市町村や学校等に、全国的な状況との比較による課題把握、指導改善等を行う機会を提供するため、全数調査を継続的に実施する。あわせて経年変化分析や経済的な面も含めた家庭の状況と学力等の状況の把握・分析等が可能な「きめ細かい調査」を組み入れるなど調査の充実を図る。また、調査結果を活用した教育委員会や学校等における教育施策や教育指導の充実・改善に向けた一層の取組を促す。』

(1) 調査内容

① 教科に関する調査(国語、算数・数学、理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none"> ・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 <p style="text-align: right;">など</p>

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

② 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 (例) 国語の勉強は好きですか、授業の内容はどの程度分かりますか、一日にテレビを見る時間、携帯電話等の使用時間、読書時間、勉強時間の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 (例) 学力向上に向けた取組、指導方法の工夫、教育の情報化、教員研修、家庭・地域との連携状況 など

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

(2) 時間割(平成27年度)

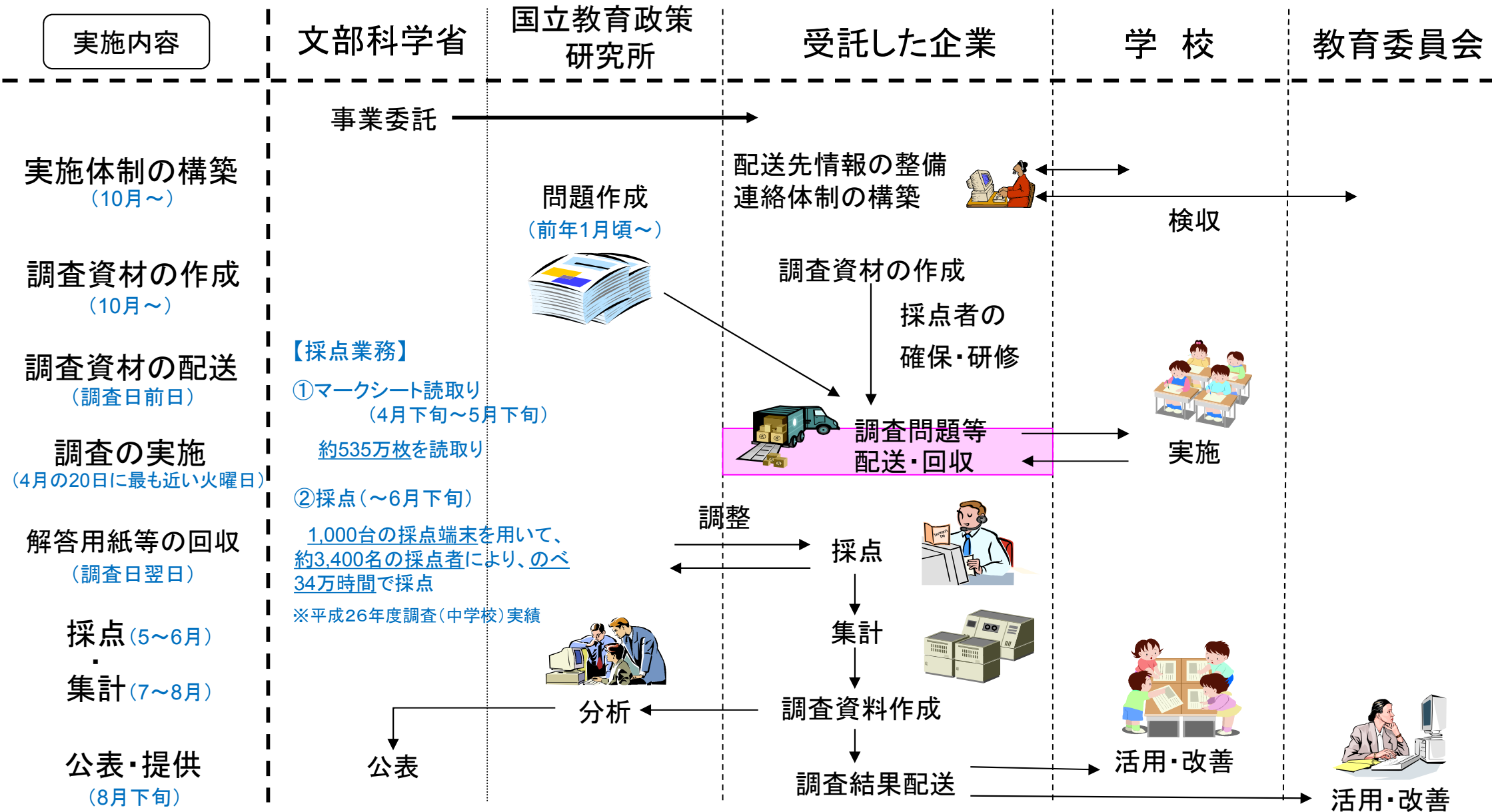
① 小学校(児童質問紙は、4時限目終了以降に、各学校の状況に応じて実施。)

1時限目	2時限目	3時限目	4時限目	
国語A(20分)、算数A(20分)	国語B(40分)	算数B(40分)	理科(40分)	児童質問紙(20分程度)

② 中学校(生徒質問紙は、5時限目終了以降に、各学校の状況に応じて実施。)

1時限目	2時限目	3時限目	4時限目	5時限目	
国語A(45分)	国語B(45分)	数学A(45分)	数学B(45分)	理科(45分)	生徒質問紙(20分程度)

全国学力・学習状況調査における全体の流れ



標準化得点が低い県と全国平均の差の縮小 —全国学力・学習状況調査の結果から—

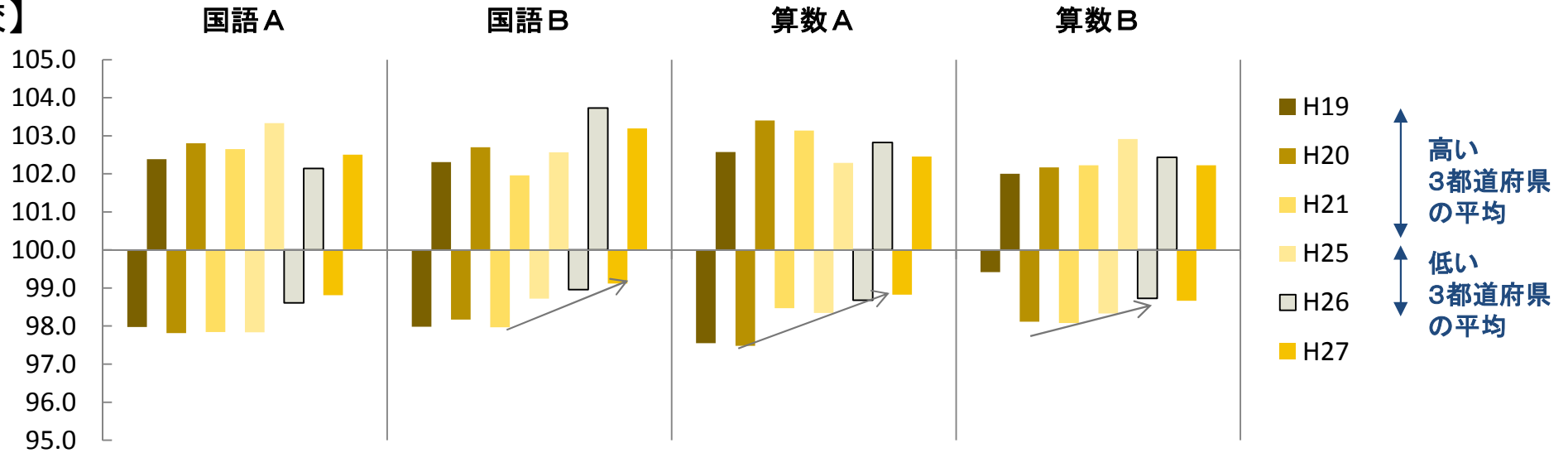
◆各年度で標準化得点(公立)が低い3都道府県の平均を見ると、全国平均との差は縮小傾向にあり、学力の底上げが進展している。

標準化得点の推移

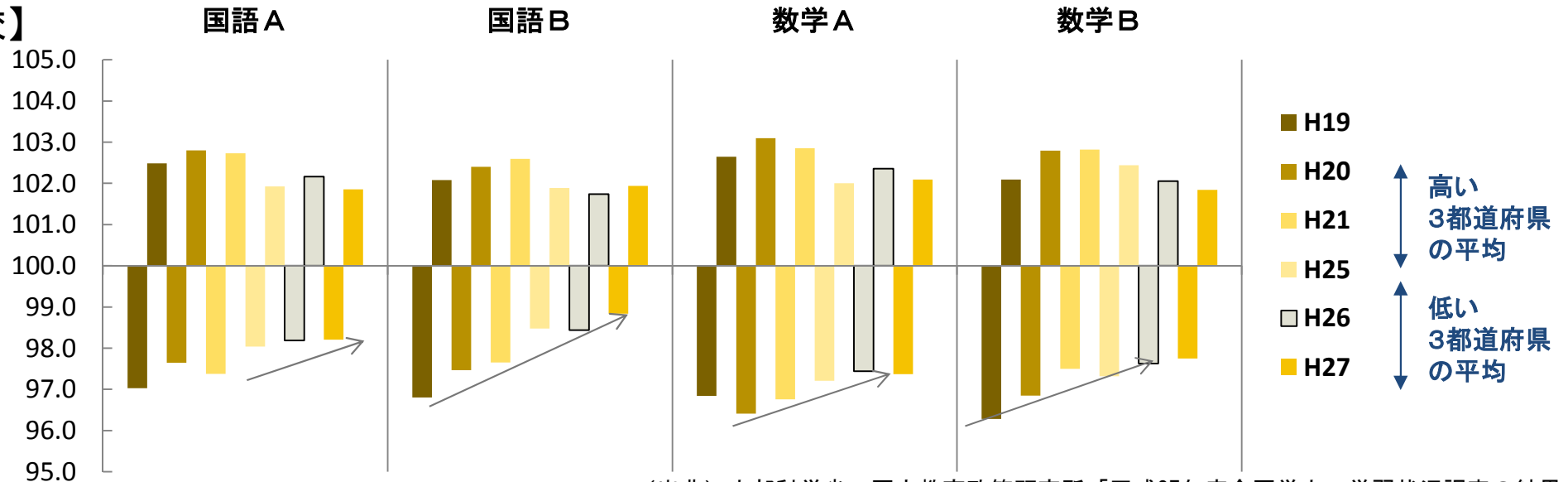
(※高い3都道府県と低い3都道府県の状況)

※標準化得点…各年度の調査は問題が異なることから、平均正答率による単純な比較ができないため、年度間の相対的な比較をすることが可能となるよう、各年度の調査の全国(公立)の平均正答数がそれぞれ100となるように標準化した得点

【小学校】



【中学校】



◆学力は改善傾向にある一方で、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることについて課題が指摘されている。

小学校

<国語>

- 立場や根拠を明確にして話し合うことについて、発言をする際に一定の立場に立ってはいるが、**根拠を明確にした上で発言をする点**に、依然として課題がある。

<算数>

- 図を観察して数量の関係を理解したり、数量の関係を表現している図を解釈したりすることに課題がある。
- 数量の大小を比較する際に、**根拠となる事柄を過不足なく示し、判断の理由を説明すること**について、改善の状況が見られる設問もあるものの、依然として課題がある。

中学校

<国語>

- 自分の考えを表す際に、根拠を示すことは意識されているが、**根拠として取り上げる内容を正しく理解した上で活用する点**に課題がある。
- 文章や資料から必要な情報を取り出し、伝えたい事柄や根拠を明確にして自分の考えを書くことについて、説明する際に、文章や資料から必要な情報を取り出してはいるが、それらを用いて**伝えたい内容を適切に説明する点**に、依然として課題がある。

<数学>

- 記述式問題は、特に**確率を用いた理由の説明、グラフを用いた方法の説明**に課題がある。
- 図形の性質を証明することについて、着目すべき図形を指摘することは良好であるが、**方針を立て、証明を書くこと**に課題がある。

◆判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることについて引き続き課題が指摘されている。

算数・数学、国語

小学校

<国語>

- 新聞のコラムを読んで、筆者の意図や思考を想定しながら文章全体の構成や表現の工夫を捉えることに課題がある。また、引用することに、依然として課題がある。
- 学校新聞を書く場面において、目的や意図に応じ、取材した内容を整理しながら記事を書くことに課題がある。

<算数>

- 基準量，比較量，割合の関係を捉え，基準量を求めることに依然として課題がある。

中学校

<国語>

- 伝えたい事実や事柄について自分の考えや気持ちを示してはいるが，根拠を明確にして書く点に、依然として課題がある。
- 目的に応じて文章や資料から必要な情報を取り出してはいるが、それらを基にして自分の考えを具体的にまとめる点に、依然として課題がある。

<数学>

- 記述式問題のうち、予想した事柄の説明には改善の状況が見られるが、数学的な表現を用いた理由の説明に課題がある。

◆3年ぶりに実施した理科については、前回(平成24年度)調査で見られた課題「観察・実験の結果などを整理・分析した上で、解釈・考察し、説明すること」について、課題の所在が明確になった。

理科

小学校

- 観察・実験の結果を整理し考察することについて、得られたデータと現象を関連付けて考察することは相当数の児童ができているが、**実験の結果を示したグラフを基に定量的に捉えて考察すること**に課題がある。
- 予想が一致した場合に得られる**結果を見通して実験を構想**したり、**実験結果を基に自分の考えを改善**したりすることに課題がある。

中学校

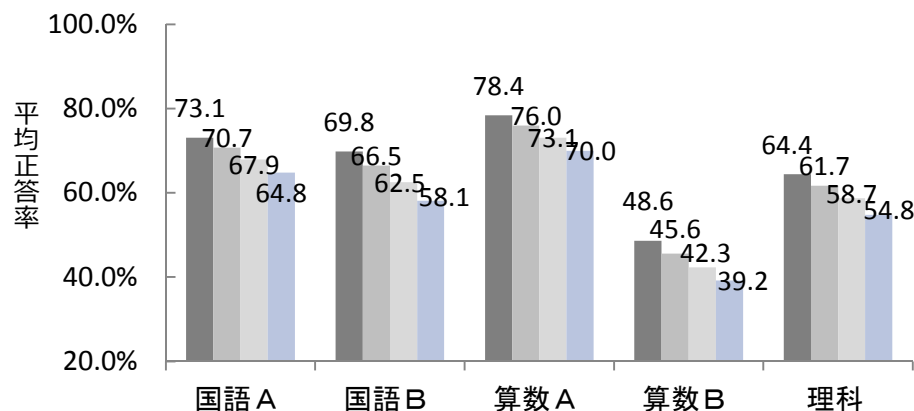
- 物質を化学式で表すことは良好であるが、**特定の質量パーセント濃度における水溶液の溶質の質量と水の質量を求めること**に依然として課題がある。
- 「化学変化を表したグラフ」や「実験結果を示した表」から分析して解釈し、変化を見いだすことは良好であるが、**実験結果を数値で示した表から分析して解釈し、規則性を見いだすこと**には課題がある。
- **課題に正対した実験を計画することや考察すること**に課題がある。

◆「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができるか」について、肯定的回答の方が平均正答率が高い状況であった。

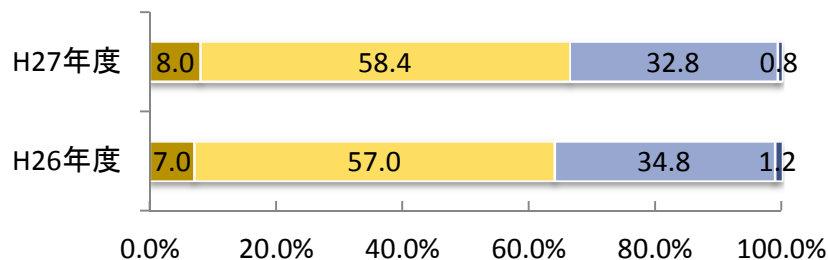
【質問項目】

調査対象学年の児童生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができると思いますか。

【小学校】

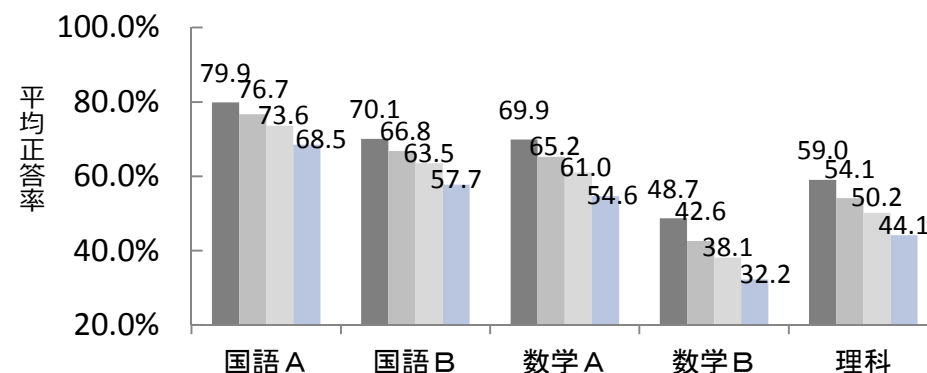


■ そのとおりだと思う ■ どちらかといえば、そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない

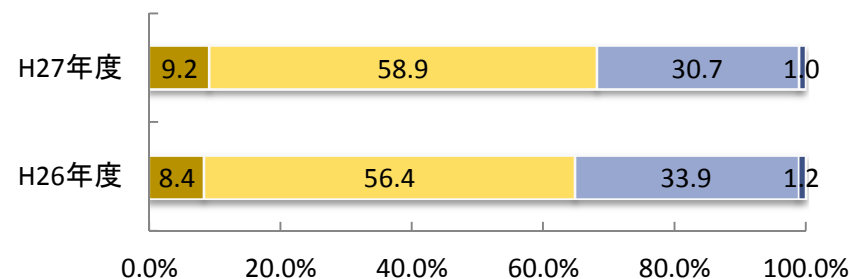


■ そのとおりだと思う ■ どちらかといえば、そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない

【中学校】



■ そのとおりだと思う ■ どちらかといえば、そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない

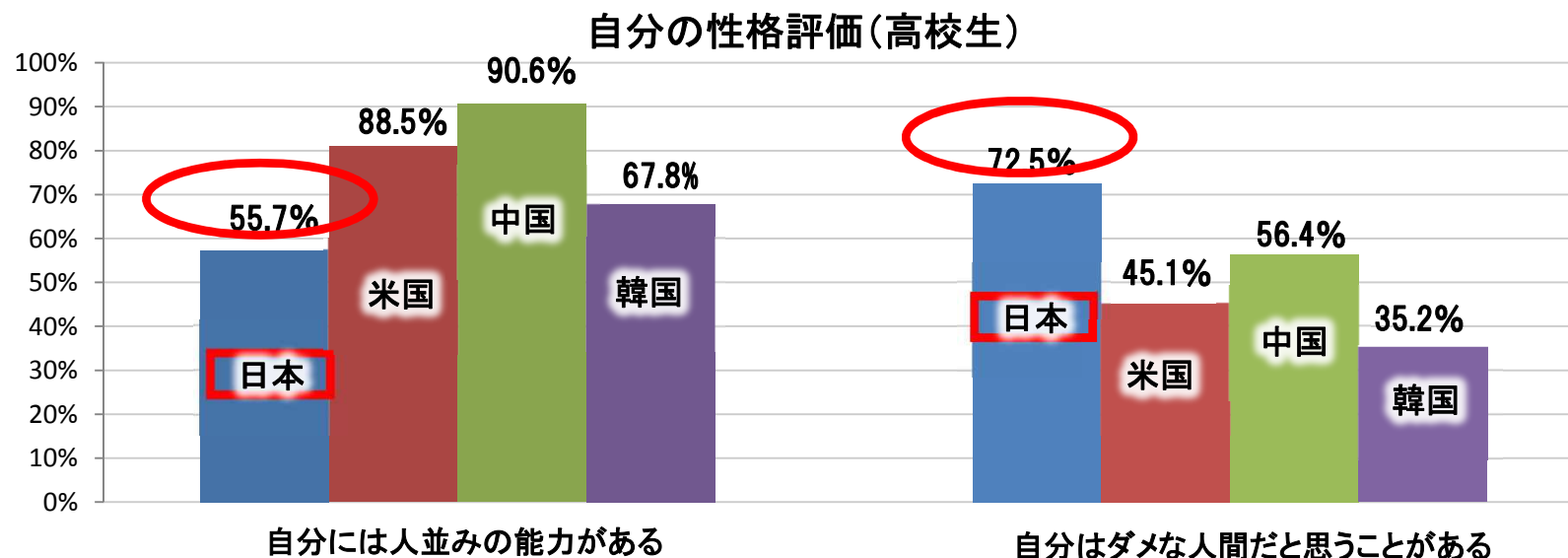


■ そのとおりだと思う ■ どちらかといえば、そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない

※選択肢毎の平均正答率は、選択肢の回答数が100校未満のものについては、一つ前の選択肢の回答とまとめて算出

生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識

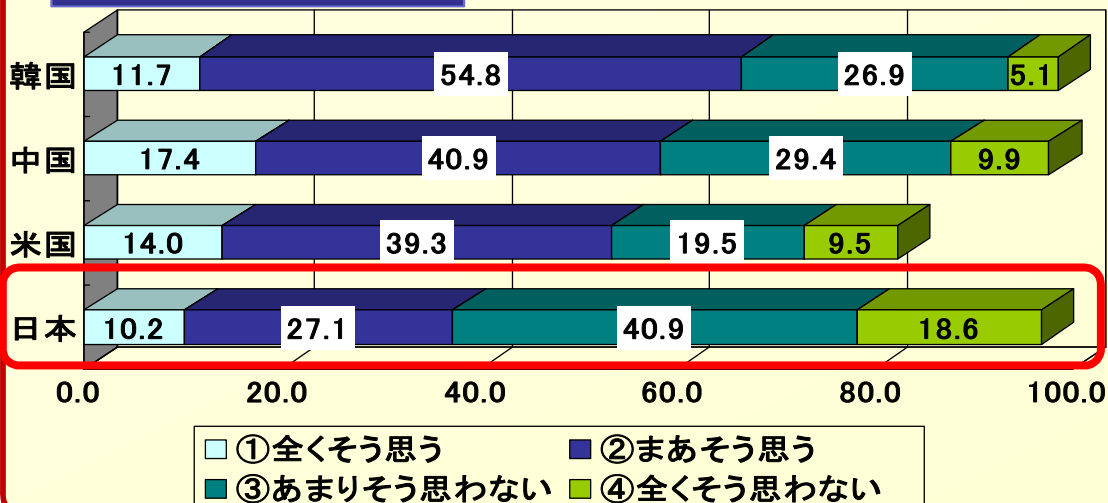
◆米中韓の生徒に比べ、日本の生徒は、「自分には人並みの能力がある」という自尊心を持っている割合が低く、「自らの参加により社会現象が変えられるかもしれない」という意識も低い。



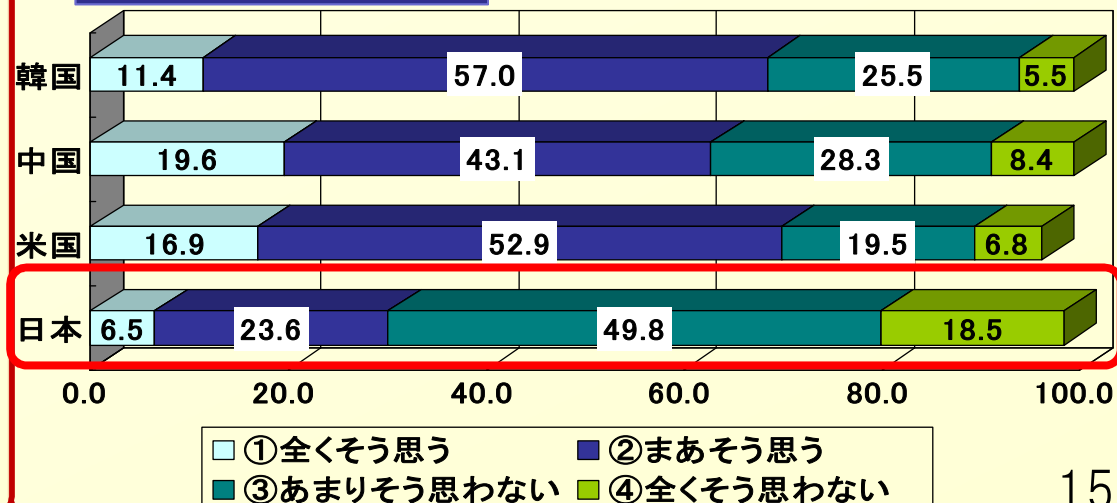
(出典)
 (財)国立青少年教育振興機構
 「高校生の生活と意識に関する調査報告書」(2015年8月)より
 文部科学省作成

【問33-2】私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない

中学生



高校生



(出典)(財)一ツ橋文芸教育振興協会、(財)日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識 - 日本・アメリカ・中国・韓国の比較 - (2009年2月)」より文部科学省作成

調査結果の概要

【聞くこと】

- 「応答問題」では、肯定的に決まった応答表現や、Where や Whoseを用いた疑問文に対する応答などにおいて、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 所有代名詞や否定文で応えること、文形式ではなく内容に応じて応える問題、申し出や依頼に対する応答などは、定着が十分ではないと考えられる。
- 「詳細理解問題」では、数字の聞き取りや聞いた英語を視覚的に絵と結び付けやすい問題については、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 前置詞の意味や後置修飾の意味のとらえ方、不定詞の理解、多くの情報を整理して理解することには課題があると考えられる。

【読むこと】

- 「詳細理解問題」では、文の意味内容が直接的に絵に結びつく問題は、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 第3学年では設定通過率を上回るまたは同程度と考えられる問題数の合計が半数未満であった。特に、前置詞の理解、連語の意味、いくつかの情報を整理して正確に内容を読みとることなどにおいて課題がある。
- 「概要・要点理解問題」では、書かれた情報を整理して、発話の意図をとらえる問題は、前回の同一問題の通過率を下回った。
- 「言語使用に関する知識理解問題」で、日常的な慣用表現は定着が見られる。

【書くこと】

- 「トピック指定問題」では、まとまった内容の文章を書くことが弱く、通過率が設定通過率を下回った。be動詞と一般動詞の併用や、代名詞の変化ができていない誤答が目立つとともに、無解答率が高い。
- 「条件指定問題」では、例文を参考にして紹介文を書く問題や英語のメモをもとに手紙を完成させる問題で、前回の同一問題の通過率を上回った。
- 「文構造問題」では、where で始まる疑問文などの問題で、前回の同一問題の通過率を下回った。また、後置修飾、不定詞などの構造について課題がある。

「話すことに関する調査」を実施

- イラストを提示したり, 音声を聞かせたりして, 生徒の発話や応答を録音し, 評価。
 - 英語学習に対する意識や学習習慣などに関する質問紙調査も実施。
- 全国的に教育課程の実現状況を見るための, 「話すこと」に焦点を当てた調査は, 初めての試み

【調査対象】

- 調査対象学年中学校第3学年
- 調査実施期間平成17年11月～12月
- 調査実施学校数及び生徒数33校1,090人
- 調査内容
 - 「スピーキングテスト」
 - 質問紙調査(生徒及び教師)



結果のポイント

- 日常生活に関わる基本的な単語の発話及び発音は良好
- 相手の話しかけ(質問)に対し, 状況に即して適切に英語で応答する能力は, 定型表現を用いた応答については身に付いている。
- 自分の考えや気持ちなどが聞き手に伝わるように話す力に課題

話しかけ(質問)の内容を聞いて理解し、それに合った内容を聞き手に正しく伝える力
(Section 3)

絵を見て、その内容についての質問に答える問題では、正答率は約6割。
定型表現(天気)は正答率が高いが、ものの値段、行為や数については課題。

問題 話しかけに対して、
英語で教えてください。



正答例 It's eight hundred yen.

	問題		正答率	無解答
1	How's the weather in New York?	天気	77.7%	12.5%
2	How many English classes do you have in a week?	数	57.6%	35.5%
3	You look sleepy. What did you do last night?	行為	55.8%	37.1%
4	Where is the cat?	場所	61.5%	25.4%
5	Excuse me. How much is that bag?	値段	53.8%	31.9%

指導の改善にむけて

- 定型としての対話練習ばかりでなく、意味を考え、正確に伝える練習が大切。

自分の考えや気持ちなどが聞き手に伝わるように話す力 (Section 4)

「好きな季節」について、その季節を選んだ理由とその季節にどんなことをしたいかなどについて話す問題では、正答率は約3割。無解答率は約1割。

問題 テーマ:好きな季節 ○ 選んだ理由 ○ どのようなことをしたいか 考えてください 話してください。	話の内容と話の情報量を満たしているもの (例) I like winter in the seasons because my birthday is in winter and I like snow a lot. And I like to ski and I like to Yukigassen with my friends. And the Christmas is in winter, so I like it because I can have much presents. So I like winter a lot.	32.2%
	話の内容は満たしているが、話の情報量を満たしていないもの (例) I like summer because I like summer vacation. I want to swim in the sea.	
	指示された事項の一部についてしか話していないもの (例) I like summer because I like swimming.	56.0%
	発話がないもの	11.8%

指導の改善にむけて

- 日頃から様々なトピックで練習が必要。文法や語いなどの定着を図ることも大切。

平成22年度特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）抜粋

国立教育政策研究所

- 調査対象学年／中学校第3学年
- 調査実施日／平成22年11月8日～11月19日
- 調査実施学校数及び生徒数／101校（約3,300人）
全国の国公私立中学校から無作為抽出

調査結果における主な課題と指導の改善事項

調査結果における主な課題

指導の改善事項

①文字、符号の使い方、語と語の区切り 問題1…p.8

- 呼びかけの文において、符号「,」と「?」が必要となる位置を判断し、適切な符号を用いることができなかった生徒の割合は約7割

- 普段の指導の中で、文意や読み手を意識して符号を活用させる機会を増やすなど

②語と語のつながり（文の構造） 問題5…p.12,16

- 後置修飾（前置詞句の形容詞的用法）における語句整序の問題の通過率は約4割
- 疑問文や否定文をコミュニケーションの中で正しく使うことが十分身に付いているとはいえない

- 日本語との対比の中で語の配列の違いにふれながら書かせ、後置修飾を使って身の回りのものを表現させるなど
- 場面設定を明確にし、対話や文章のながれにふさわしい文形式や時制を考えさせるなど

①読んだ文章に関して自分の意見・感想を書く力 問題3…p. 23

● 読み取った内容に関して、書きたい内容を適切な語彙や文の構造が分からず書けなかった、と回答した生徒の割合は約3割

● 自分の意見・感想等を書くために必要となる語彙や文の構造等の知識を深めるとともに、読み取った文章中の表現を活用して書かせるなど

②資料・状況を基に自分の意向を正しく伝える文章を書く力 問題6…p. 27

● 与えられた資料・状況のみを基に（日本語の指示なし）内容を考えて書けた生徒の割合は約3割

● 自分の意向を伝える内容が書くことができたが、正しく伝わるように表現することができなかった生徒の割合は約2割

● マッピングを取り入れ思考の活性化を図った上で、アイデアの取捨選択を行わせるなど

● ペアやグループでメモや手紙の交換を行い、書かれた内容がどのように伝わっているのかを確かめさせるなど

③まとまった内容の文章を書く力 問題4・7…p. 30, 34

問題4

● 誤答には、文構造等の誤りを含むものが多い

問題7

● まとまりのある内容の文章を書けた生徒のうち、文と文のつながりを工夫して展開して書くことができなかった生徒の割合は約7割

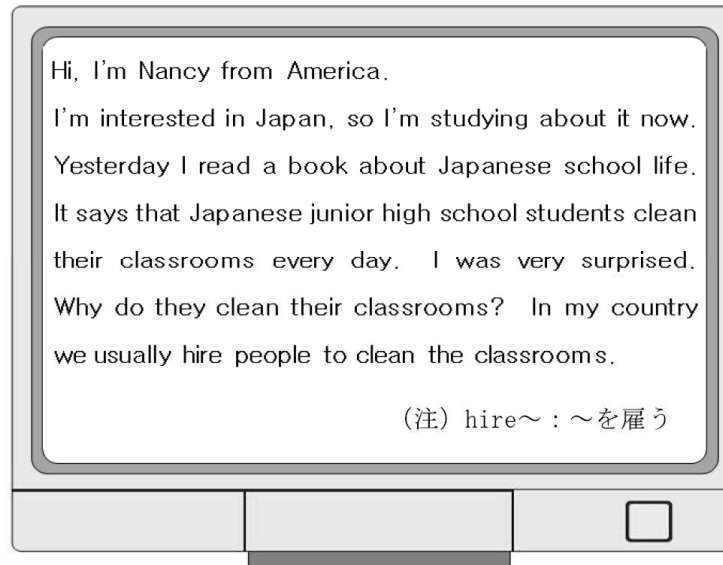
● 文構造等を繰り返し指導したり、まとめて取り扱ったりして、理解の体系化を図り、適切な表現を選択させるなど

● 文の羅列に対して、内容に一貫性をもたせるように配列を考えるとともに、代名詞やつなぎ言葉などを効果的に使って文章にさせるなど

3 問題3における調査結果

解答類型と結果

あなたは、インターネットの意見交換の掲示板に、アメリカ人の中学生ナンシー（Nancy）による次のような書き込みを見つけました。これをよく読んで、あとの問いに答えなさい。



(1) この英文の内容に関する次の質問に日本語で答えなさい。

〔質問〕 ナンシーは日本の中学校での生活のどんなことに驚いたのですか。

【解答類型ごとの反応率】

通過率：58.3%

類型番号	解答類型 (◎：正答, ○：準正答)	反応率 (%)	
◎1	「毎日」「生徒が」「教室を」「掃除する」の要素を全て記述しているもの	42.6	55.0
◎2	「生徒が」「教室を」「掃除する」の要素を全て記述しているもの	12.4	
○3	「生徒が」「教室を」「掃除する」の要素を全て記述しているが、「毎日」の要素が不適切であるもの	0.1	3.3
○4	「生徒が」「掃除する」の要素を記述しているが、「教室を」の要素は記述していないか不適切であるもの	3.2	
5	「教室を」「掃除する」の要素を記述しているが、「生徒が」の要素は記述していないか不適切であるもの	18.3	
6	「掃除する」の要素を記述しているが、「生徒が」「教室を」の要素は記述していないか不適切であるもの	2.6	
7	本文に関連する内容を記述しているが、ナンシーが驚いたことは何かという問いに対して不適切な内容を記述しているもの	2.7	
9	上記以外の解答	7.5	
0	無解答	10.5	

通過率 58.3%のうち、正答と準正答はそれぞれ 55.0%、3.3%であった。誤答のうち、類型 5 と無解答はそれぞれ 18.3%、10.5%であった。

【解答類型ごとの解答例】

類型番号	解答例 (◎：正答, ○：準正答)	判断の視点
◎1	日本の中学生は、毎日自分たちの教室を掃除すること	日本の掃除の様子が分かる全ての要素が「毎日」も含めて記述している。
◎2	中学生が自分たちの教室をそうじしていること	日本の掃除の様子が分かる全ての要素が記述している。
○3	日本の生徒は、教室のそうじを最後の日に自分達でやることに驚いた	日本の掃除の様子として「毎日」の意味を誤って記述している。
○4	クラスメイト皆で毎日そうじをしていたこと	日本の掃除の様子として、「誰が」の要素は明確であるが、「どこを」が記述していない。
5	何故教室をきれいにするのか？	日本の掃除の様子が分かる要素での1つである「誰が」が記述されていないが、その他の必要な要素は記述している。
6	毎日そうじをすること	「誰が」、「どこを」の要素が記述していない。
7	そうじをする人をやとっていること	日本の中学生の生活の記述ではない。
9	日本の学校に生徒の教室がたくさんあること	本文に記述がない。

(2) ナンシーが掲示板に書いていることについて、あなたはどんな感想や意見を持ちましたか。15語以上の英語で書きなさい。文の数はいくつになってもかまいません。ただし、符号は語数に数えないこととします。

【解答類型ごとの反応率】

通過率：40.2%

類型番号	解答類型 (◎：正答, ○：準正答)	反応率 (%)
◎1	英文の内容に関連した意見や感想を15語以上で書いているもの	10.8
○2	英文の内容に関連した意見や感想を15語以上で書いているが、文法・語法等の誤りがみられる(文構造等の誤りはみられない)もの	29.4
3	英文の内容に関連した意見や感想を14語以下で書いているもの	0.8
4	英文の内容に関連した意見や感想を14語以下で書いているが、文法・語法等の誤りがみられる(文構造等の誤りはみられない)もの	2.3
5	英文の内容に関連はしているが意見や感想ではないことを書いているもの	0.9
6	英文の内容と関連のないことや矛盾することを書いているもの、又は書いていることの内容が矛盾しているもの	6.2
7	15語以上で書いているが、文構造等の誤りがみられるもの	14.0
8	14語以下で書いており、文構造等の誤りがみられるもの	4.5
9	上記以外の解答	1.5
0	無解答	29.5

通過率40.2%のうち、正答と準正答はそれぞれ10.8%、29.4%であった。誤答のうち、類型7と無解答はそれぞれ14.0%、29.5%であった。

【解答類型ごとの解答例】

類型 番号	解答例 (◎ : 正答, ○ : 準正答) 判断の視点
◎ 1	We clean our classroom every day. I think that cleaning our classroom is very important for us. (17 語) 17 語(15 語以上)で本文の内容に対する自分の考えを含めた英文を記述している。
○ 2	I was very surprised. Because she says America is hire people to clean the classrooms. 15 語(15 語以上)で本文の内容に対する感想を記述している。ただし、2文目に不適切な主語や不必要な be 動詞の追加など、文法・語法等の誤りがある
3	I think Japanese school life is better than American school life. (11 語) 本文の内容に対する自分の考えを記述しているが、11 語(14 語以下)である。
4	I was very suprised. I think good idea it. (9 語) 単語のつづり誤りは不問。9 語(14 語以下)で本文の内容に対する感想と自分の考えを記述している。また、2文目の I think 以降に文構造の誤りがある。
5	I'm interested in America. So I'm studying about it now. I read a book yesterday. It says that Japanese junior high school students clean then classrooms everyday. (26 語) 本文をほぼ書き写しており、本文の内容に対する意見や感想とはいえない。
6	I read it. I was very surprised at American students usually clean the classrooms. I think that it's important for us to clean the classrooms. (25 語) 2文目の内容が本文の内容に反している。
7	I like the classroom. So I clean the classroom. Because after clean make me happy. (15 語) 15 語(15 語以上)で記述しているが、3文目に主語がないなどの文構造の誤りがある。
8	I don't know hire people to clean the classrooms. (9 語) 9 語(14 語以下)で記述しており、I don't know 以降に主語がないなどの文構造等の誤りがある。
9	ナンシーは日本の学校生活に驚いていました。 日本語で記述している。

2. 学習評価の在り方について

観点別学習状況の評価について

- 学習評価には、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能。
- 各教科においては、学習指導要領等の目標に照らして設定した観点ごとに学習状況の評価と評定を行う「目標に準拠した評価」として実施。
⇒きめの細かい学習指導の充実と児童生徒一人一人の学習内容の確実な定着を目指す。

学力の3つの要素と評価の観点との整理

【現行】

学習評価の4観点

関心・意欲・態度

思考・判断・表現

技能

知識・理解

【以下の3観点に沿った整理を検討】

学力の3要素 (学校教育法) (学習指導要領)

知識及び技能

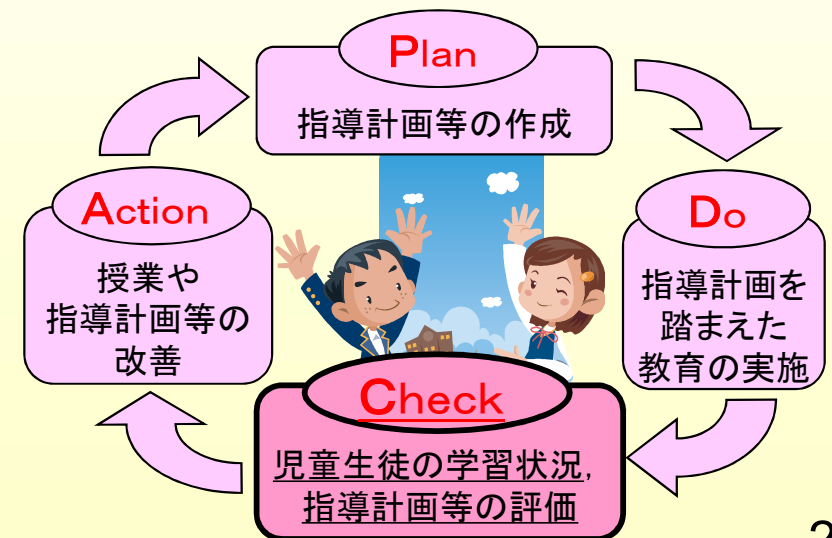
思考力・判断力
・表現力等

主体的に学習に
取り組む態度

学習指導と学習評価のPDCAサイクル

- 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要。

指導と評価の一体化



多様な評価方法の例

児童生徒の学びの深まりを把握するために、多様な評価方法の研究や取組が行われている。

「パフォーマンス評価」

知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品(プロダクト)や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演(狭義のパフォーマンス)を評価する。

「ルーブリック」

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価規準)からなる評価基準表。

項目	尺度	IV	III	II	I
項目		…できる …している	…できる …している	…できる …している	…できない …していない

記述語

ルーブリックのイメージ例

「ポートフォリオ評価」

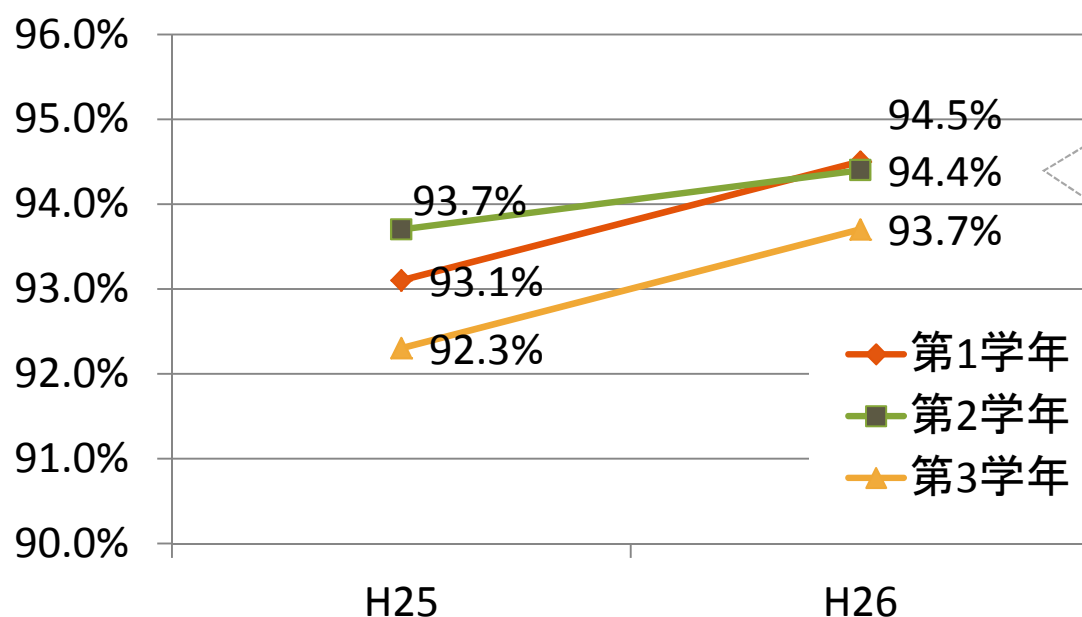
児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等を集積。そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

英語 中学校におけるパフォーマンス等の評価の現状

- 「話すこと」や「書くこと」の能力を評価するスピーキングテストやライティングテスト等を実施している学校は、第1学年では94.5%で、平成25年度の93.1%から1.4ポイント上昇、第2学年では94.4%で、平成25年度の93.7%から0.7ポイント上昇、第3学年では93.7%で、平成25年度の92.3%から1.4ポイント上昇している。

パフォーマンステストの状況

スピーキングテストやライティングテスト等のパフォーマンステストの実施状況



具体的な実施内容	
スピーキングテスト	スピーチ
	インタビュー(面接)
	プレゼンテーション
	ディスカッション
	ディベート
ライティングテスト(エッセイ等)	
その他	

3. 新しい学習指導要領等 が目指す姿

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

①「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」

各教科等に関する個別の知識や技能など。身体的技能や芸術表現のための技能等も含む。

②「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」

主体的・協働的に問題を発見し解決していくために必要な思考力・判断力・表現力等。

③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(人間性や学びに向かう力等)」

①や②の力が働く方向性を決定付ける情意や態度等に関わるもの。以下のようなものが含まれる。

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。
- ・多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会作りに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性に関するもの。

何ができるようになるか

育成すべき資質・能力を育む観点からの
学習評価の充実

何を学ぶか

育成すべき資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

- ◆ グローバル社会において不可欠な英語の能力の強化(小学校高学年での教科化等)や、我が国の伝統的な文化に関する教育の充実
- ◆ 国家・社会の責任ある形成者として、また、自立した人間として生きる力の育成に向けた高等学校教育の改善(地理歴史科における「地理総合」「歴史総合」、公民科における「公共」の設置等、新たな共通必修科目の設置や科目構成の見直しなど抜本的な検討を行う。) 等

どのように学ぶか

アクティブ・ラーニングの観点からの
不断の授業改善

- ◆ 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」 諮問(平成26年11月) の概要

趣旨

- ◆ 子供たちが成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものも大きく変化する可能性。
- ◆ そうした厳しい挑戦の時代を乗り越え、**伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力が必要。**

- ◆ そのためには、教育の在り方も一層進化させる必要。
- ◆ 特に、学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、**学びの質や深まりを重視することが必要。**また、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重要。

審議事項の柱

1. 新しい時代に求められる資質・能力を踏まえた、初等中等教育全体を通じた改訂の基本方針、学習・指導方法の在り方（アクティブ・ラーニング）や評価方法の在り方等

2. 新たな教科・科目等の在り方や、既存の教科・科目等の目標・内容の見直し

- グローバル社会において求められる英語教育の在り方（小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化）
- 国家及び社会の責任ある形成者を育むための高等学校教育の在り方
 - ・主体的に社会参画するための力を育てる新たな科目等
 - ・日本史の必修化の扱いなど地理歴史科の見直し
 - ・より高度な思考力等を育成する新たな教科・科目
 - ・より探究的な学習活動を重視する視点からの「総合的な学習の時間」の改善
 - ・社会的要請も踏まえた専門学科のカリキュラムの在り方など、職業教育の充実
 - ・義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための教科・科目等 など

3. 各学校におけるカリキュラム・マネジメントや、学習・指導方法及び評価方法の改善支援の方策

⇒平成28年度中を目途に答申、2020年(平成32年)から順次実施予定

育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の在り方や、教育内容の見直し例①

グローバル社会で求められる力の育成

◆ グローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう、外国語で躊躇せず意見を述べ他者と交流していくための力や、我が国の伝統文化に関する深い理解、他文化への理解等をどのように育むべきか。特に英語の能力について、例えば以下のような点をどのように考えるべきか。

- (1) 小学校から高等学校までを通じて達成を目指すべき教育目標を、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、四技能に係る一貫した具体的な指標の形式で示すこと
- (2) 小学校では、中学年から外国語活動を開始し音声に慣れ親しませるとともに、高学年では、学習の系統性を持たせる観点から教科として行い、身近で簡単なことについて互いの考えや気持ちを伝え合う能力を養うこと
- (3) 中学校では、授業は英語で行うことを基本とし、身近な話題について互いの考えや気持ちを伝え合う能力を高めること
- (4) 高等学校では、幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う能力を高めること

高等学校教育

◆ 中央教育審議会における高大接続改革に関する議論や、これまでの関連する答申等も踏まえつつ、高校生が、**国家・社会の責任ある形成者として、自立して生きる力を身につける**ことができるよう、例えば以下のような課題についてどのように改善を図るべきか。

- (1) 今後、国民投票年齢が満18歳以上となることなども踏まえ、国家・社会の責任ある形成者となるための教養と行動規範や、主体的に社会に参画し自立して社会生活を営むために必要な力を、実践的に身に付けるための新たな科目等の在り方
- (2) 日本史の必修化の扱いなど地理歴史科の見直しの在り方
- (3) より高度な思考力・判断力・表現力等を育成するための新たな教科・科目の在り方
- (4) より探究的な学習活動を重視する視点からの「総合的な学習の時間」の改善の在り方
- (5) 社会的要請を踏まえた専門学科のカリキュラムの在り方など、職業教育の充実の在り方
- (6) 義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための教科・科目等の在り方

育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の在り方や、教育内容の見直し例②

幼児教育

- 子供の発達の早期化をめぐる現象や指摘、幼児教育の特性等を踏まえ、幼児教育と小学校教育をより円滑に接続させていくためには、どのような見直しが必要か。

体育・健康

- 子供の体力等の現状を踏まえつつ、2020年のオリンピック・パラリンピック開催を契機に、子供たちの運動・スポーツに対する関心や意欲の向上を図るとともに、体育・健康に関する指導を充実させ、運動する習慣を身に付け、健康を増進し、豊かな生活を送るための基礎を培うためには、どのような見直しが必要か。

特別支援教育

- 障害者の権利に関する条約に掲げられたインクルーシブ教育システムの理念を踏まえ、全ての学校において、発達障害を含めた障害のある子供たちに対する特別支援教育を着実に進めていくためには、どのような見直しが必要か。

その際、特別支援学校については、小・中・高等学校等に準じた改善を図るとともに、自立と社会参加を一層推進する観点から、自立活動の充実や知的障害のある児童生徒のための各教科の改善などについて、どのように考えるべきか。

その他の課題

- 社会の要請等を踏まえ、教科等を横断した幅広い視点からの取組が求められる様々な分野の教育の充実のための方策について、関係する会議等におけるこれまでの議論の状況等を踏まえつつ、どのように考えるべきか。
- 各教科等の教育目標や内容を、初等中等教育を通じて一貫した観点からより効果的に示すためにどのような方策が考えられるか。また、学年間や学校種間の教育課程の接続の改善を図ることについて、現在中央教育審議会では御議論いただいている小中一貫教育に関する検討状況も踏まえつつ、どのように考えるべきか。

＜社会に開かれた教育課程＞

- ① **社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会づくりを目指すという理念を持ち、教育課程を介してその理念を社会と共有していくこと。**
- ② **これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合っていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化していくこと。**
- ③ **教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。**

主体性・多様性・協働性
学びに向かう力
人間性 など

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

どのように学ぶか
(アクティブ・ラーニング)

学習評価の充実
カリキュラム・マネジメントの充実

何を知っているか
何ができるか

個別の知識・技能

知っていること・できる
ことをどう使うか

思考力・判断力・表現力等

学習指導要領改訂に係る議論に関するこれまでの経過と今後のスケジュール

平成26年2月～9月	英語教育の在り方に関する有識者会議
平成26年11月	中央教育審議会総会 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問
平成26年12月	教育課程部会 ・教育課程企画特別部会を設置
平成27年1月	教育課程企画特別部会（第1回）
	新しい時代にふさわしい学習指導要領の基本的な考え方や、 教科・科目等の在り方、学習・指導方法及び評価方法の在り 方等に関する基本的な方向性について、計14回審議
平成27年8月	教育課程企画特別部会（第14回） 教育課程部会 ・「論点整理」をとりまとめ
平成27年 秋以降	論点整理の方向に沿って学校段階等別・教科等別に専門的に検討 （外国語ワーキンググループ設置・議論）
平成28年	教育課程部会又は教育課程企画特別部会における議論を踏まえて、 審議のまとめ
平成28年度内	中央教育審議会として答申

（小学校は32年度から、中学は33年度から全面实施予定。高校は34年度から年次進行により実施予定。）

4. 学習指導要領の理念を実現するために必要な方策（英語関係）

外国語教育に関する現状について

外国語教育の現状・課題

①学年が上がるにつれて英語の学習意欲に課題。4技能、特に発信能力(話す、書く)に課題。

- ・小学校5,6年生の72.3%、中学1年生の60.2%が「英語の授業が好き」と回答。【H26年度小学校外国語活動実施状況調査】
 - ・高校3年生の58.3%が「英語の学習が好きではない」と回答。【H26年度英語教育改善のための英語力調査】
 - ・生徒の英語力について、4技能全般、特に「話すこと」と「書くこと」の能力が課題。高校3年生はCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)A1(英検3~5級程度)の上位~A2(英検準2級程度)の下位レベルが多い。【H26年度英語教育改善のための英語力調査】
- (参考)「第2期教育振興基本計画」に掲げる成果目標
中学校卒業段階:英検3級程度以上、高等学校卒業段階:英検準2級~2級程度以上を達成している中高生の割合:50%。
⇒達成状況:中学3年生:約34.7%、高校3年生:約31.9%

②小学校高学年で「読む」「書く」も含めた言語活動への知的要求が高まっている

③校種間の接続が十分とは言えない

- ・中学1年生の約8割が、小学校で「英単語・文を読む」「英単語・文を書く」ことをもってしておきかたと回答。【H26年度小学校外国語活動実施状況調査】
- ・小中連携したカリキュラムの作成に取り組んでいる中学校区の割合:13.1%
- ・中高連携に取り組んでいる学校の割合:31.3% 【H26年度英語教育実施状況調査】

④自分の意見や考えを話したり書いたりすることができると思う生徒の割合が低く、またそのような指導をしていると考える教員の割合も低い

- ・「エッセイなど、ある程度まとまりのある文章を書くことができる、ほぼできている」と回答した中学2年生の割合:33.6%
- ・「ディベートやディスカッションをすることができる、ほぼできている」と回答した中学2年生の割合:20.7%
- ・授業における言語活動の指導状況について、「よく行う、時々行う」と回答した中学校外国語科担当教員の割合:スピーチ:56.6%、プレゼンテーションやスキット(寸劇):36.0%、ディベート、ディスカッション:34.7%

【H26年度小学校外国語活動実施状況調査】

⑤「読んだ内容に基づいて書く」など技能統合型の言語活動を行っている生徒ほどスコアが高い

- ・4技能を効果的に活用した技能統合型の言語活動が十分ではない。特に、聞いたり読んだりしたことに基づいて英語で話し合ったり意見交換をしたりする経験(35.2%)や、ディベートやディスカッションの経験(17.3%)があると同等した高校3年生の割合は少ない。一方、試験結果が高い生徒(高校3年生)ほど、技能統合型の言語活動を行っている割合が高い。【H26年度英語教育改善のための英語力調査】※()内の数値は、高校3年生が第2学年のときに「よくしていたと思う、どちらかといえばしていたと思う」と回答した割合。

最近の英語教育改革に関する経緯

自民党・教育再生実行本部

成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言 (H25.4.8)等 (教育関係)

1. 英語教育の抜本的改革

①大学において、従来の入試を見直し、実用的な英語力を測るTOEFL等の一一定以上の成績を受験資格及び卒業要件とする世界レベルの教育・研究を担う大学を30程度指定し、その学生の卒業要件をTOEFL iBT 90点相当とするとともに、集中的な支援によりグローバルに活躍する人材を年10万人養成

②高等学校段階において、TOEFL iBT 45点(英検2級)等以上を全員が達成

(提言を実現するための施策)

※主に初中国語を抜群

- ・求められる英語力(TOEFL iBT 80点以上(英検準1級))を達成した教師の割合を都道府県ごとに公表

- ・少人数指導等のための教師の増員
- ・現職英語教師全員が今後5年間の間に国内外で研修受講
- ・小・中・高等学校における英語教育を抜本的に改革・強化、その一環として学校教育において英語に触れる時間を格段に増加等

【教育投資・財源特別部会提言】

2. 「教員と財源の一体改革」の実現

- ・具体的に以下の取組を進める
- これからの時代に通用する力を育む
- > 小学校における英語の教科化を含む小・中・高校を通じた英語教育の抜本的拡充

第2期教育振興基本計画 (H25~29)

第2部今後5年間に実施すべき教育上の方策 ~四つの基本的方向性に基づく、8の成果目標と30の基本施策等

2. 未来への飛躍を実現する人材の養成(H25. 6. 14閣議決定)

成果目標5(社会全体の変化や新たな価値を主導・創造する人材等の養成)
※グローバル人材の養成(略)

【成果目標】

<グローバル人材関係>

①国際共通語としての英語力の向上

- ・学習指導要領に基づき達成される英語力の目標(中学校卒業段階:英検3級程度以上、高等学校卒業段階:英検準2級程度~2級程度以上)を達成した中高学生の割合50%
- ・英語教員に求められる英語力の目標(英検準1級、TOEFL iBT80点、TOEIC730点程度以上)を達成した英語教員の割合(中学校:50%、高等学校:75%)

基本施策16

外国語教育, 双方の留学生交流・国際交流, 大学等の国際化など, グローバル人材育成に向けた取組の強化

【主な取組】

16-1 英語をはじめとする外国語教育の強化

学習指導要領の着実な実施を促進するため、外国語教育の教材整備、英語教育に関する優れた取組を行う拠点校の形成、外部検定試験を活用した生徒の英語力の把握検証などによる、戦略的な英語教育改善の取組の支援を行う。また、英語教育ポータルサイトや映像教材による情報提供を行い、生徒の英語学習へのモチベーション向上や英語を使う機会を拡充を目指す。大学入試においても、高等学校段階で育成される英語力を適切に評価するため、TOEFL等外部検定試験の一層の活用を目指す。

また、**小学校における英語教育実施学年の早期化、指導時間増、教科化、指導体制の在り方等や、中学校における英語による英語授業の実施について、検討を開始し、逐次必要な見直しを行う。**教員の指導力・英語力の向上を図るため、採用や自己研鑽等での外部検定試験の活用を促すとともに、海外派遣を含めた教員研修等を実施する。

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」 (H25.12.13文科省発表)

初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。

1. グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方

○小学校(中)学年:活動型

- ・週1~2コマ程度・コミュニケーション能力の素地を養う・学級担任を中心に指導

○小学校(高)学年:教科型

- ・週3コマ程度(「モジュール授業」も活用)

○中学校

- ・身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養う
- ・授業を英語で行うことを基本とする

○高等学校

- ・幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者となる程度流暢にやりとりができる能力を養う
- ・授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化(発表、討論、交渉等)

2. 新たな英語教育の在り方実現のための体制整備

- ・英語教育推進リーダーの加配措置・養成研修

- ・小学校専科教員の指導力向上

- ・小学校学級担任の英語指導力向上

- ・中・高等学校英語科教員の指導力向上

- ・外部検定試験を活用し、県等ごとの教員の英語力の達成状況を定期的に検証

※全ての英語科教員について、英検準1級、TOEFL iBT 80点程度以上の英語力を確保

- ・外国語指導助手(ALT)の配置拡大、地域人材等の活用促進(ガイドラインの策定等)

- ・ALT等向けの研修強化・充実

- ・指導用教材の開発等

英語教育の在り方に関する有識者会議(H26.2~26.9)

今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ~グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言~(H26.9末)

改革1. 国が示す教育目標・内容の改善

○学習指導要領では、小・中・高を通して、1.各学段段階の学びを円滑に接続させる、2.「英語を使って何が出来るようになるか」という観点から一貫した教育目標(4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む)を示す(具体的な学習到達目標は各学校が設定)。

小学校:

- ・中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高める。

- ・高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。

中学校:

- ・身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。

高等学校:

- ・幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に体験し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を高める。

改革5. 学校における指導体制の充実

○地域の大学・外部専門機関との連携による研修等の実施や、地域の指導的立場にある教員が英語教育担当指導主事や外部専門家等とチームを組んで指導に当たることなどにより、地域全体の指導体制を強化。地域の中心となる英語教育推進リーダー等の養成、定数措置などの支援が必要。

○小学校教員が自信を持って専科指導に当たることが可能となるよう、「免許法認定講習」開設支援等による中学校英語免許取得を促進。英語指導に当たる外部人材、中・高等学校英語担当教員等の活用を促進。

○大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善が必要

中央教育審議会

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」H26文科初第852号(H26.11.20)

○グローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう、外国語で躊躇(ちゅうちよ)せず意見を述べ他者と交流していくために必要な力や、我が国の伝統文化に関する深い理解、他文化への理解等をどのように育んでいくべきか。

特に、国際共通語である英語の能力について、**文部科学省が設置した「英語教育の在り方に関する有識者会議」の報告書においてまとめられた提言も踏まえて**、例えば以下のような点についてどのように考えるべきか。

- ・小学校から高等学校までを通じて達成を目指す教育目標を、「英語を使って何が出来るようになるか」という観点から、4技能に係る一貫した具体的な指標の形式で示すこと

- ・小学校では、中学年から外国語活動を開始し音声に慣れ親しませるとともに、高学年では、学習の系統性を持たせる観点から、教科として行い、身近で簡単なことについて互いの考えや気持ちを伝え合う能力を養うこと

- ・中学校では、授業は英語で行うことを基本とし、身近な話題について互いの考えや気持ちを伝え合う能力を高めること

- ・高等学校では、幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う能力を高めること

教育課程企画特別部会「論点整理(案)」 (H27.8.26教育課程部会へ報告)

○各学校段階の学びを円滑に接続させるため、「英語を使って何が出来るようになるか」という観点から、**国として小・中・高一貫した指標を設定、学習・指導方法、評価方法を改善することが必要。**

小学校:

- 高学年においては、教科としての英語教育のうち基礎的なものとして、これまでの体験的な「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」の4技能を扱う言語活動を通じて、4技能への積極的な態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うことが必要。

- 中学年から、体験的に「聞く」「話す」を中心とした外国語活動を通じて、言語や文化についての体験的理解や、音声等への慣れ親しみ等を発達段階に適した形で養うとともに、指導内容・方法や活動の設定、教材の工夫、他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めることが必要。

- 小学校高学年において4技能を扱う言語活動を展開し定着を図り、教科として系統的な指導を行うためには、**例えば70単位時間程度の時数が必要**であると考えられる。また、中学年における外国語活動については、**従来の外国語活動と同様に35単位時間程度の時数が必要**であると考えられる。

- これらの年間35単位時間増となる時数を確保するためには、高学年においては、平成20年管中の小・中学校の教育課程の枠組みに関する小学校の授業時数(1年間の総授業時数)の考え方を踏まえつつ、知識・技能の定着等を返すため、**年間を10~15分程度の短い時間を単位として繰り返した教科指導を行う効果的な短時間学習(帯学習、モジュール学習、以下、「短時間学習」という。)**として実施する可能性も含めた専門的な検討が必要。

中学校:

- 小学校での学びの連続性を図りつつ、高等学校の目標・内容の高度化に向けた基礎を培う観点から、発達段階に応じた、より具体的に身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養うための一層の改善を行う。その際、学校、地域、他教科等での学習内容等と関連付けて、互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動を重視した授業を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とする観点から、中学校においても**授業を英語で行うことを基本**とする。あわせて、新たに**4技能を測定する全国的な学力調査の実施**により、指導改善のサイクルを確立することが重要である。

高等学校:

- 中学校との円滑な接続を図る観点から、日常生活から社会問題・時事問題など幅広い話題について、生徒の英語力等の状況に応じた**発表、討論、議論、交渉等を行う言語活動を豊富に体験し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う**。その際、生徒や学校の多様なニーズを踏まえ、グローバルな視点で他教科等での学習内容等と関連付けて、外国語を用いて課題解決を図る力を育成するための言語活動の充実も図る。

- 引き続き、授業を英語で行うことを基本とするとともに、①必修履修も含めた4技能を総合的に扱う言語活動を中心とした科目、②特に課題がある「話すこと」及び「書くこと」によって発信する能力を更に強化する技能統合型の言語活動を充実するための**科目構成の見直し**を行う。

「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(教員養成部会 中間まとめ)(H27.7.16)

国は外部専門機関等との連携により、各地域の指導者となる「英語教育推進リーダー」の養成を推進する必要がある。また、このような地域のリーダーの活動が可能となるような体制整備が必要である。さらに、小学校教員が教科化に向けた専科指導や小・中・高校の一貫した学びの接続に留意した指導に当たることが可能となるよう必要な研修を充実するとともに、「免許法認定講習」の開設支援等による小学校免許状と中学校英語免許状の併有を促進する必要がある。…養成・研修に必要なコアカリキュラム開発を行い、課程認定の際の審査や各大学による教職課程の改善・充実の取組に活用できるようにするとともに、…「小学校英語」に関する科目を教職課程に位置づけるための検討を進めるべき

教育再生実行会議 第2次提言(座長 蒲田薫)

「これからの大学教育等の在り方について」(H25.5.28)

○国は、**小学校の英語学習の抜本的拡充(実施学年の早期化、指導時間増、教科化、専任教員配置等)や中学校における英語による英語授業の実施、初等中等教育を通じた系統的な英語教育について、学習指導要領の改訂も視野に入れ、諸外国の英語教育の事例も参考にしながら検討**する。国、地方公共団体は、少人数での英語指導体制の整備、JETプログラムの拡充等によるネイティブ・スピーカーの配置拡大、イングリッシュキャンプなどの英語に触れる機会の充実を図る。

「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」<抄>(平成25年6月14日)(産業競争力会議 議長 安倍晋三)

○(略)また、「鉄は熱いうちに打て」のこたわざどおり、初等中等教育段階からの英語教育を強化し、高等教育等における留学機会を抜本的に拡充し、世界と戦える人材を育てる。

④世界と戦える人材を育てる

(イ)初等中等教育段階からの英語教育を強化する。このため、**小学校における英語教育実施学年の早期化、教科化、指導体制の在り方等や、中学校における英語による英語授業の実施について検討**する。

⑤グローバル化等に対応する人材の強化

- ・小学校における英語教育(小学校5、6年生における外国語活動の成果を今年度中に検証するとともに、**実施学年の早期化、指導時間増、教科化、指導体制の在り方等や、中学校における英語による英語授業の実施について、今年度から検討を開始し、逐次必要な見直しを**

「日本再興戦略」改訂2014-未来への挑戦-<抄>(平成26年6月24日)

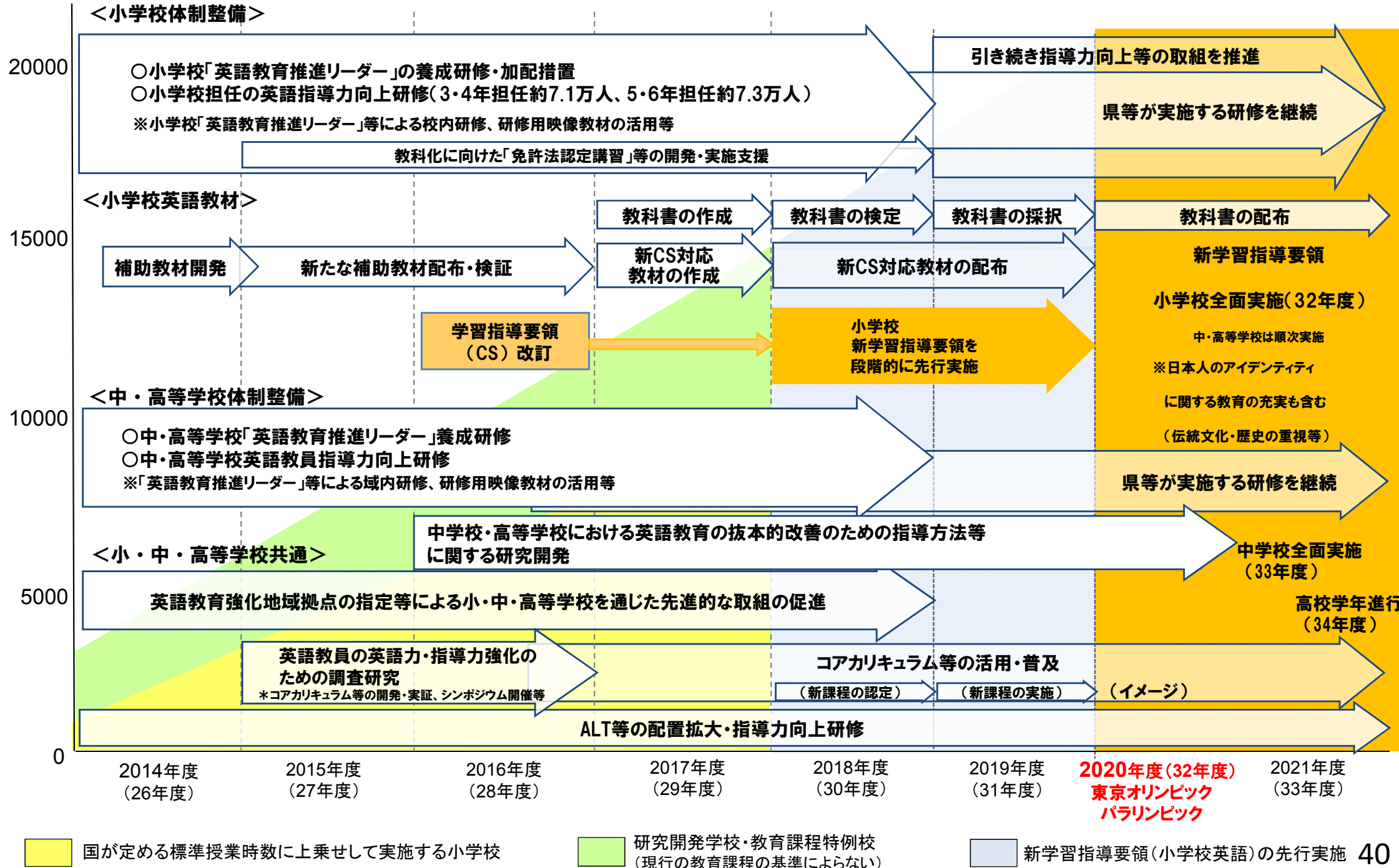
(産業競争力会議 議長 安倍晋三)

○(略)また、初等中等教育段階からの英語教育の強化のため、**小学校英語の早期化等を行う拠点への支援や教員の英語指導力向上のための取組を開始**した。

○**小学校における英語教育実施学年の早期化等に向けた学習指導要領の改訂を2016年度に行うこと**を目指し、**指導体制の強化、外部人材の活用促進など、初等中等教育段階における英語教育の在り方について検討**を行い、**本年秋を目途に取組を進める**。学校現場等における外国人活用による抜本的強化を図り、実践的な英語教育を実現させる。あわせて、在外教育施設における質の高い教育の実現及び海外から帰国した子供の受け入れ環境の整備を進める。

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画スケジュール(イメージ)

(小学校数)



今後の英語教育の改善・充実方策について 報告（概要）

～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～

英語教育の在り方に関する有識者会議 平成26年9月

- 文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（平成25年12月）の具体化のため、平成26年2月～9月に9回開催（そのほか計5回の小委員会を開催）。
- 改革のうち、教育課程や教員養成等については、中央教育審議会等における全体的な議論の中で更に検討を要する。

改革を要する背景

- グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題。
- 我が国の英語教育は、現行の学習指導要領を受けた改善も見られるが、特にコミュニケーション能力の育成について更なる改善を要する課題も多い。東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020（平成32）年を見据え、小・中・高を通じた新たな英語教育改革を順次実施できるよう検討を進める。並行して、これに向けた準備期間の取組や、先取りした改革を進める。

改革1. 国が示す教育目標・内容の改善

- 学習指導要領では、小・中・高を通して①各学校段階の学びを円滑に接続させる、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標（4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む）を示す（資料参照）（具体的な学習到達目標は各学校が設定）。
- 高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。あわせて、生徒の英語力を把握し、きめの細かな指導の改善・充実や生徒の学習意欲の向上につなげるため、従来から設定されている英語力の目標（学習指導要領に沿って設定される目標（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度から2級程度以上）を達成した中・高生の割合50%）だけでなく、高等学校段階の生徒の特性・進路等に応じた英語力、例えば、高等学校卒業段階で、英検2～準1級、TOEFL iBT60点前後以上等を設定し、生徒の英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。
 - ・ 小学校： 中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高める。高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。学習の系統性を持たせるため教科として行うことが求められる。小学校の英語教育に係る授業時数や位置づけなどは、今後、教育課程の全体の議論の中で更に専門的に検討。
 - ・ 中学校： 身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション能力の養成を重視する。
 - ・ 高等学校： 幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に体験し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を高める。

改革2. 学校における指導と評価の改善

- 英語学習では、失敗を恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することが重要。中学校・高等学校では、主体的に「話す」「書く」などを通じて互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を展開することが重要。
また、生徒が英語に触れる機会を充実し、中学校の学びを高等学校へ円滑につなげる観点から、中学校においても、生徒の理解の程度に応じて、授業は英語で行うことを基本とする。
- 各学校は、学習指導要領を踏まえながら、4技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、学習到達目標を設定（例：CAN-DO形式）し、指導・評価方法を改善。併せて主体的な学びにつながる「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を重視し、観点別学習状況の評価において、例えば、「英語を用いて～ができる」とする観点を「英語を用いて～しようとしている」とした評価を行うことによって、生徒自らが主体的に学ぶ意欲や態度などを含めた多面的な評価方法等を検証・活用。
- 小学校高学年で教科化する場合、適切な評価方法については先進的取組を検証し、引き続き検討。

改革3. 高等学校・大学の英語力の評価及び入学者選抜の改善

- 生徒の4技能の英語力・学習状況の調査・分析を行い、その結果を、教員の指導改善や生徒の英語力の向上に生かす。
- 入学者選抜における英語力の測定は、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要。
- 各大学等のアドミッション・ポリシーとの整合性を図ることを前提に、入学者選抜に、4技能を測定する資格・検定試験の更なる活用を促進。
そのため、学校、テスト理論等の専門家、資格・検定試験の関係団体等からなる協議会を設置し、
 - ・適切な資格・検定試験の情報提供、
 - ・指針づくり（学習指導要領との関係、評価の妥当性、換算方法、受験料・場所、適正/公正な実施体制等）、
 - ・試験間の検証、英語問題の調査・分析・情報提供等の取組を早急に進めることが必要。
- 「達成度テスト」の具体的な検討を行う際には、連絡協議会の取組を参考に英語の資格・検定試験の活用の在り方も含め検討。

改革4. 教科書・教材の充実

- 小学校高学年で教科化する場合、学習効果の高いICT活用も含め必要な教材等を開発・検証・活用。
- 主たる教材である教科書を通じて、説明・発表・討論等の言語活動により、思考力・判断力・表現力等が一層育成されるよう、次期学習指導要領改訂においてそのような趣旨を徹底するとともに、教科用図書検定基準の見直しに取り組む。
- 国において音声や映像を含めた「デジタル教科書・教材」の導入に向けた検討を行う。
- ICT予算に係る地方財政措置を積極的に活用し、学校の英語授業におけるICT環境を整備。

改革5. 学校における指導体制の充実

- 地域の大学・外部専門機関との連携による研修等の実施や、地域の指導的立場にある教員が英語教育担当指導主事や外部専門家等とチームを組んで指導に当たることなどにより、地域全体の指導体制を強化。
地域の中心となる英語教育推進リーダー等の養成、定数措置などの支援が必要。
- 各学校では、校長のリーダーシップの下で、英語教育の学校全体の取組方針を明確にし、中核教員等を中心とした指導体制の強化に取り組むことが重要。
- 小学校の学びを中学校へ円滑に接続させるため、小中連携の効果が期待される相互乗り入れ授業、カリキュラムづくり、指導計画作成などを行う合同研修など実質的な連携促進が必要。
- 小学校の中学年では、主に学級担任が外国語指導助手（ALT）等とのティーム・ティーチングも活用しながら指導し、高学年では、学級担任が英語の指導力に関する専門性を高めて指導する、併せて専科指導を行う教員を活用することにより、専門性を一層重視した指導体制を構築。
小学校教員が自信を持って専科指導に当たることが可能となるよう、「免許法認定講習」開設支援等による中学校英語免許状取得を促進。
英語指導に当たる外部人材、中・高等学校英語担当教員等の活用を促進。
- 2019（平成31）年度までに、すべての小学校でALTを確保するとともに、生徒が会話、発表、討論等で実際に英語を活用する観点から中・高等学校におけるALTの活用を促進。
- 大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善が必要。
例えば、
 - ・小学校における英語指導に必要な基本的な英語音声学、英語指導法、ティーム・ティーチングを含む模擬授業、教材研究、小・中連携に対応した演習や事例研究等の充実、
 - ・中・高等学校において授業で英語によるコミュニケーション活動を行うために必要な英語音声学、第2言語習得理論等を含めた英語学、4技能を総合的に指導するコミュニケーションの科目の充実等を、英語力・指導力を充実する観点から改善することが必要。今後、教員養成の全体の議論の中で検討。同時に、小学校の専科指導や中・高等学校の言語活動の高度化に対応した現職教員の研修を確実に実施。

小・中・高等学校を通じて一貫した目標設定の在り方について

※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会が発表。

2016年1月12日現在 取扱注意 英語教育の抜本的強化のイメージ

(秋以降、外国語WGにおいて専門的に検討予定)

改訂版(案)

中央教育審議会教育課程企画特別部会
外国語ワーキンググループ
平成28年1月12日現在

※具体的な小学校の授業時数については、年内~年明けを目途に教育課程全体の構成とともに検討を進め、一定の方向性を提示

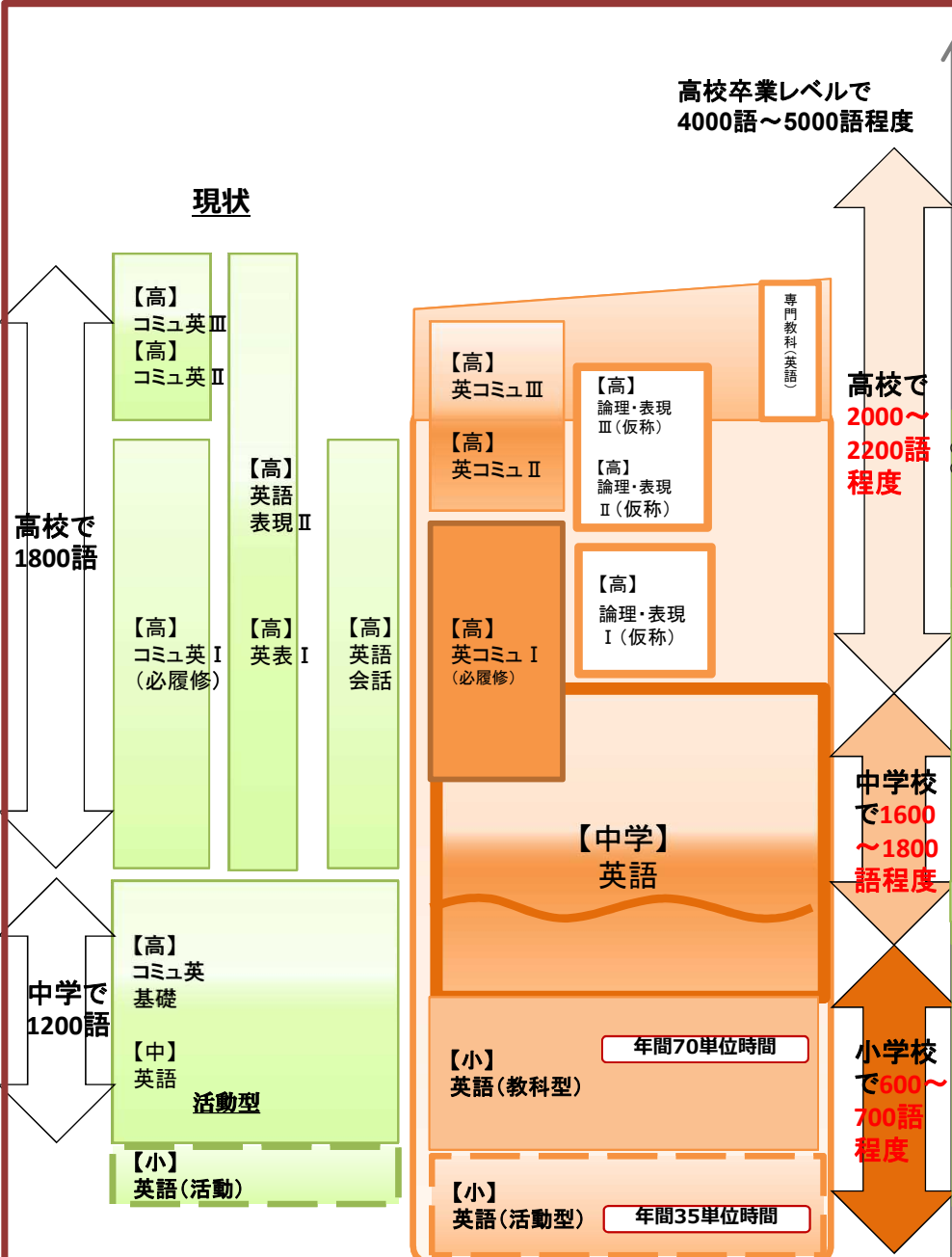
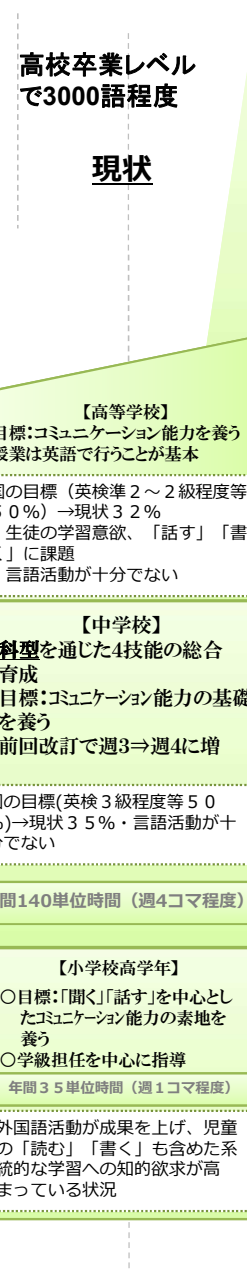
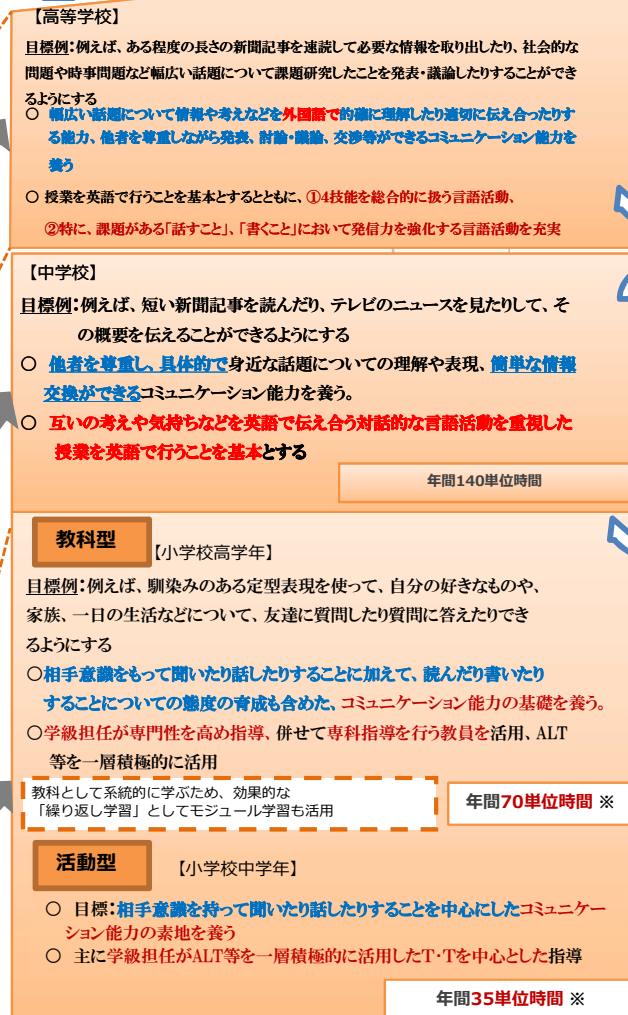
新たな英語教育

成熟社会にふさわしい我が国の価値を海外展開したり、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成

大学や海外、社会で英語力を伸ばす基盤を確実に育成

高等学校基礎学力
テスト(仮称)
改善のためのPDCA
サイクル

全国的な英語
4技能学力調査
改善のためのPDCA
サイクル



	小学校高学年		中学校	
教科等の目標	<p>外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、<u>身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。</u></p> <p><ポイント> ・身近で簡単なこと ・コミュニケーション能力の基礎</p>		<p>外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、<u>身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。</u></p> <p><ポイント> ・身近な話題 ・理解、表現、情報交換できるコミュニケーション能力</p>	
英語等の目標	<p><英語> <u>(1)身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。</u> <u>(2)身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。</u> <u>(3)アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読むことに対する興味を育てる。</u> <u>(4)アルファベットを書くことに慣れ親しみ、英語を書くことに対する興味を育てる。</u></p> <p><ポイント> ・身近で簡単なこと ・初歩的な英語</p>		<p><英語> ○身近な話題について話される英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。 ○身近な話題について、英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。 ○身近な話題について書かれた英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。 ○身近な話題について、英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。</p> <p><ポイント> ・身近な話題 ・自分の考えなどの表現 ・相手の意向などの理解</p>	
指標形式の目標	<p>「話すこと」(発表) Spoken Production 【SP】 【SP1】自分の考えや気持ち、事実などを、聞き手を意識しながら初歩的な英語で伝えることができるようにする。 【SP2】与えられたテーマについて初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができるようにする。</p>	<p>「話すこと」(やりとり) Spoken Interaction 【SI】 ○聞いたことに相づちをうったり、感想を言ったりすることができるようにする。</p>	<p>「話すこと」(発表) Spoken Production 【SP】 【SP1】自分の考えや気持ち、事実などを、聞き手を意識しながら英語で伝えることができるようにする。 【SP2】自分の意見や主張を基に、与えられたテーマについて短いスピーチをすることができるようにする。</p>	<p>「話すこと」(やりとり) Spoken Interaction 【SI】 ○聞いたり読んだりしたことなどについてほかの人と話し合い、理解したことを確認したり、意見を伝え合ったりすることができるようにする。</p>
	<p><ポイント> ・相手を意識 ・初歩的な英語</p>		<p><ポイント> ・「発表」:小学校からの接続 ・「やりとり」:話し合いと伝え合い</p>	

次期学習指導要領「外国語」における国の指標形式の主な目標（イメージ）案（秋以降、専門的に検討予定）

- 国の目標では、小・中・高等学校の学びを円滑に接続させる、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標（指標形式の目標を含む）を示す。
- 学校では、英語を使って何ができるようになるかという観点からCAN-DO形式の学習到達目標を設定し、それに基づく指導と学習評価（筆記テストのみならず、スピーチ、インタビューテスト、エッセー等のパフォーマンス評価、観察等）

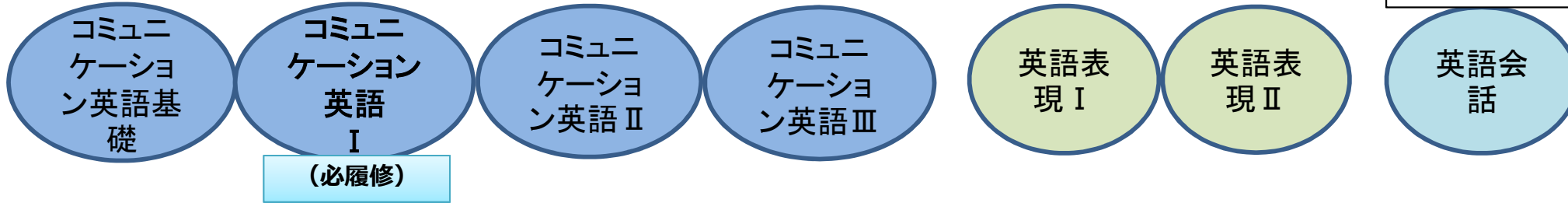
※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表。

校種	科目（イメージ）	CEFR レベル	聞くこと	読むこと	話すこと（やり取り）	話すこと（発表）	書くこと
高等学校	4技能総合型 複数の技能を統合させた言語活動が中心 （選択科目…必履修科目を 発展させた内容） （必履修科目） 発信能力向上のための言語活動（スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション等）が中心 （選択科目）	B1	<ul style="list-style-type: none"> ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身近な話題に関する比較的長い会話や身近な事柄に関する説明の概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な話題に関する比較的短い記事、レポート、資料の概要や要点を理解し、必要な情報を読み取ることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な話題や知識のある話題について、平易な英語を用いて情報や意見を交換することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 時事問題や社会問題について、具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 関心のある分野の話題について、つながりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて書くことができるようにする。
		A2	<ul style="list-style-type: none"> ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身近な話題に関する短い会話や身近な事柄に関する短い説明の概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な話題に関して平易な英語で書かれた短い説明を読み、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活に関する事柄や個人的な関心事（趣味、学校など）について、ある程度準備をすれば会話に参加することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な話題について、簡単な語句や文を用いて、自分の意見やその理由を短く述べることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な事柄（自分、学校、地域など）について、簡単な語句や文を用いて、短い説明文を書くことができるようにする。
中学校	中学校での学習内容の活用を通じた定着を含む 英語	A1	<ul style="list-style-type: none"> ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身の回りの事柄（自分、学校、地域など）に関するごく短い会話や説明を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 興味のある話題に関して平易な英語で書かれたごく短い説明を読み、イラストや写真を参考にしながら、概要を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく身近な話題であれば、基本的な表現を用いて簡単な質疑応答をすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な話題について、発表内容を準備した上で、簡単な語句を用いて複数の文で意見を述べるができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分に関するごく限られた情報（名前、年齢、趣味、好き嫌いなど）を、簡単な語句や文で書くことができるようにする。
		(Pre-A1)	<ul style="list-style-type: none"> ゆっくりとはっきりと、繰り返し話されれば、 短い簡単な指示や挨拶を理解することができるようにする。 身近で具体的な事物を表す単語を聞き取ることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近で具体的な事物を表す単語の意味を理解することができるようにする。 アルファベットを見て識別し、発音できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手のサポートがあれば、個人的な関心事（趣味、学校など）についての質問に答えることができるようにする。 日常の挨拶をしたり、挨拶に应答したりすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分に関するごく限られた情報（名前、年齢、好き嫌いなど）を、簡単な語句を用いて伝えることができるようにする。 定型表現を用いて、簡単な挨拶ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 例文を参考にしながら、慣れ親しんだ語句や文を書くことができるようにする。 アルファベットの大きな文字と小文字をブロック体で書くことができるようにする。
小学校	小学校での学習内容の活用を通じた定着を含む 英語（教科型） 4技能（聞く、話す、読む、書く） 慣れ親しみから「気付き」へ 英語（活動型） 2技能（聞く、話す）						

複数の技能を統合的に扱う言語活動を通して求められる英語力を身に付ける

高等学校における英語科目の改訂の方向性として考えられる構成（たたき台）

外国語
現行科目



課題

- 生徒の英語力について、4技能全般、特に「話すこと」と「書くこと」の能力が課題
- 英語の学習意欲に課題
- 言語活動、特に、統合型の言語活動（例：聞いたり読んだりしたことに基づいて話したり書いたりする活動）が十分ではない
- グローバル時代において、英語学習に関する生徒の多様化への対応が必要

発信力が弱い

育成すべき
資質・能力等

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、聞き手・話し手・読み手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力を養う

4技能総合型(必修科目を含む)の科目を核とする

発信能力の育成をさらに強化する

英語による思考力・判断力・表現力を高める見直し

英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ(仮称)

- 4技能を総合的に育成（受信・発信のバランス）
- 明確な目標（英語を用いて何ができるようになるか）を達成するための構成・内容
- 複数の技能を統合させた言語活動が中心
- 「英コミュⅠ」は中学校段階での学習の確実な定着（高等学校への橋渡し）を含む。

学習指導要領に掲げられる資質・能力を確実に育成するための指標形式の目標を段階的に設定

論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(仮称)

- 「話すこと」「書くこと」を中心とした発信力の強化
- スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの言語活動が中心
- 聞いたり読んだりして得た情報や考えなどを活用してアウトプットする技能統合型の言語活動

併せて専門教科「英語」の各科目も見直し
⇒ 総合英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(仮称), ディベート&ディスカッションⅠ・Ⅱ(仮称), エッセー・ライティングⅠ・Ⅱ(仮称)

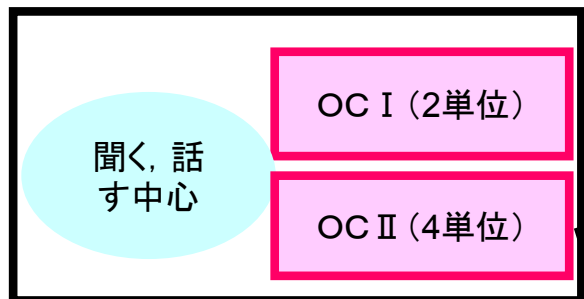
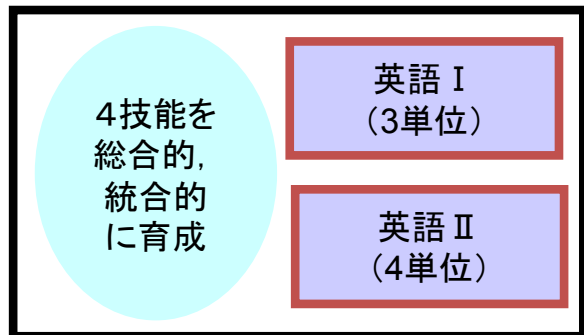
改訂の方向性(案)

生徒が実社会や実生活の中で、自らが課題を発見し、主体的・協働的に探求し、英語で考えや気持ちを互いに伝え合うことを目的とした学習

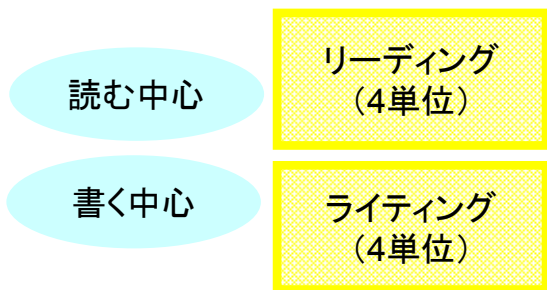
I ↓ III へ内容の高度化・話題の多様化

(参考) 現行学習指導要領の高等学校における英語科目の見直し等 (たたき台) 平成28年1月12日現在

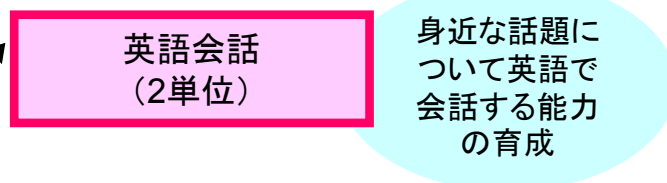
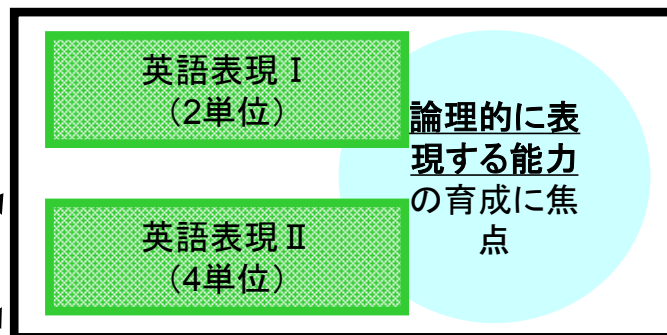
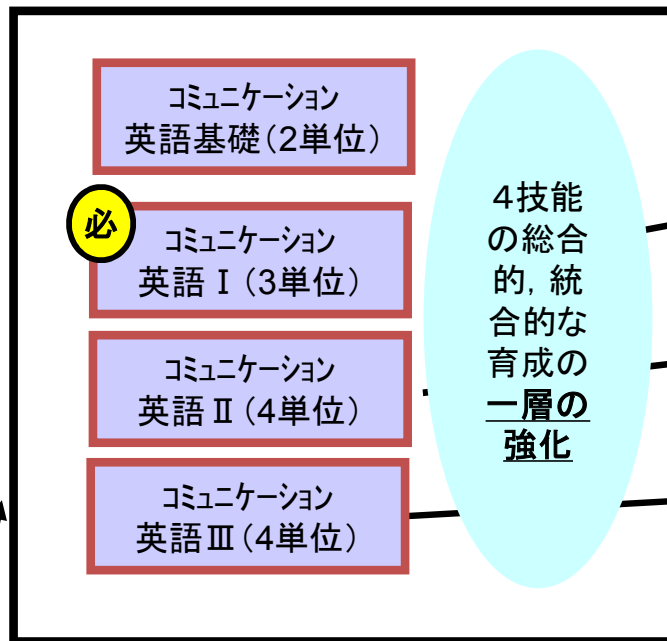
(旧)



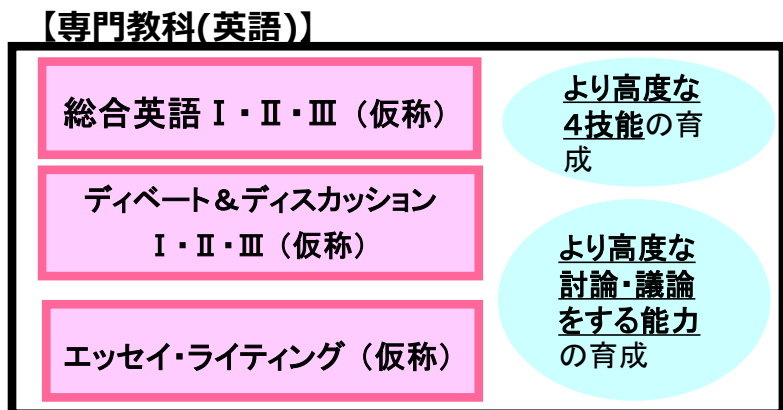
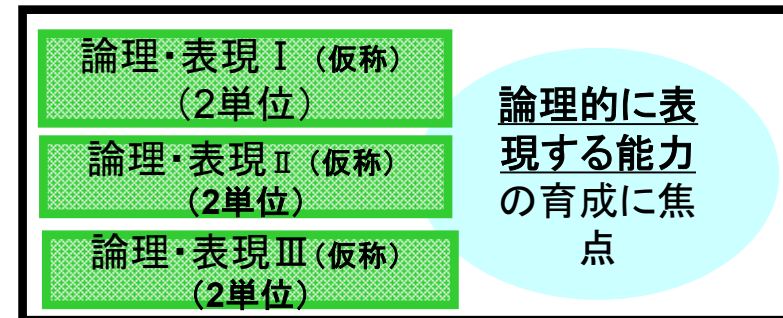
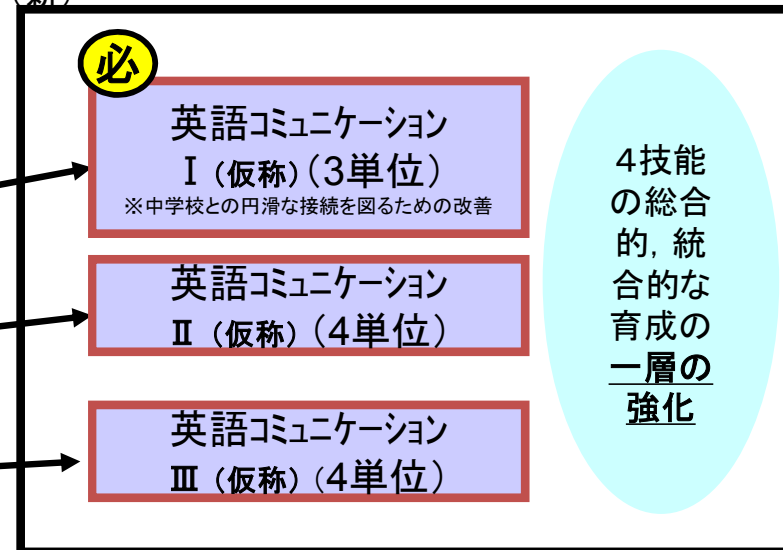
(※) OC:「オーラルコミュニケーション」の略



(現行)



(新)



(※) 矢印は教科内容再編のイメージ